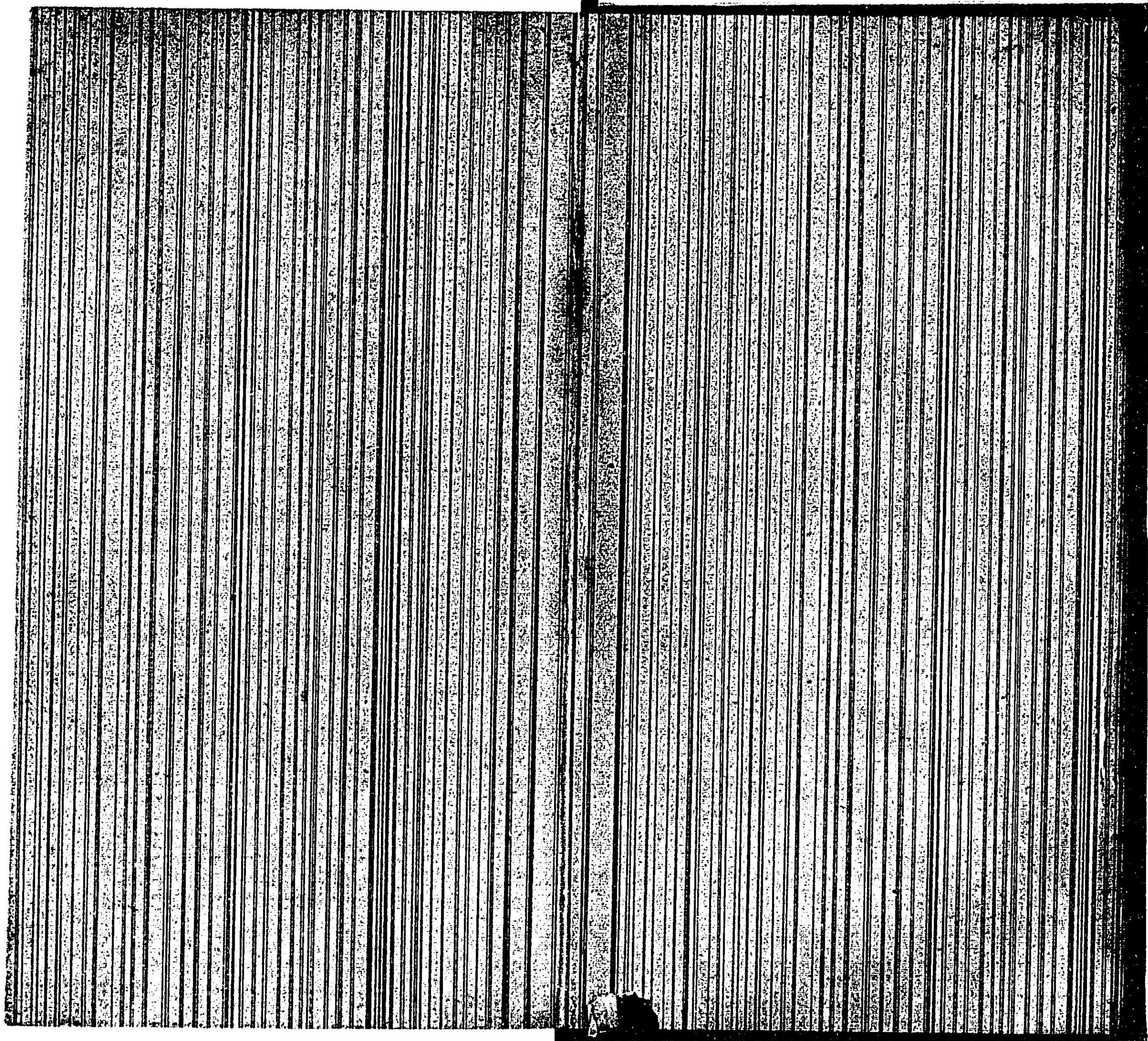


三
木
成
海

266
1951



特65
120

社 珍 講 談 叢 書
(第 六 編)
宮 本 武 藏
寶 井 馬 琴 講 演

東 京 東 亞 堂 發 兌

袖珍講談叢書發刊の辭

近頃我が文部省では新に通俗教育調査會なるものを設けられ、各方面に亘り朝野知名の學者、藝術家等を網羅し、其施設に就て慎重なる調査研究に着手した。而して同會の調査事項中、講談を以て最も主要なるものゝ一としたと云ふも、非常に見るに、其内容體裁共に野卑粗陋にして、音に其家の家庭に於て講談本なるものを見るに、堪へざるのみならず、又紳士淑女の手にするだに耻かしい感があるのは、獨り吾人が遺憾とするばかりではあるまいと思ふ。這回書肆東亞堂に於て袖珍講談叢書の發刊を企て、その内容と取題とを、一面に於いては讀者の史的趣味に適合せしむると共に、他面に於いては國民の徳性涵養に裨益あるものを選択し、講談界に於ける錚々たる諸大家に請うて、その口演を速記せしめ、毎冊を通俗教育に資せんとするの目的である。其の製本體裁の如きも、全く舊式の講談本と選を異にし、紙質を選び、印刷を鮮明にして、高尙優雅なる金文字入り、グロスマ綴ち袖珍形となしたるを以て、音に一般家庭の讀物たるに好適せるのみならず、電車汽車若しくは船中等四季旅行の途上に於いて携帶耽讀するに極めて便利である。而して冊數の如きは、豫め之れを定めず、前掲の旨意に適する好話題を得るに随ひ、續々刊行せんとするのである。希くは愛読の榮を賜はらんことを。

明治辛亥初夏
編者識

宮本武藏

寶井馬琴講演

第一席

(1) 藏 武 本 宮

今回武藝物といふ注文でございまして、勿論武といふものは結構なもので、文武兩道は車の輪の如くとか申して、武道にも文道にも、兩様とも明るければ武士は何れへ仕官をいたしますとも、天晴高祿を受けられます。今回辯じまするのは、武藝者の中、宮本武藏、之を二刀傳と稱けまして、實に高名なお話し、生れた時が永祿の五年、此の世を去つた時が正保の二年、行年八十四歳、實に長命なものであります。此の武藏といふ方の父は、長州萩の城主毛利大炊元就といふ、此のお方の家來で太郎左衛門、永祿の四年に、京都二

條室町の足利十三代將軍、義輝公の御前で、十八人の武藝者を先方へ廻し、十人に勝て勝負無しが竹光柳風軒と塚原卜傳の兩人、此の卜傳が未だ塚原小太郎勝義といつた頃、後入道して卜傳となりました、足利義輝公、吉岡の腕前を御感心あつて、日本に二人無いといふので、無二齋といふ名を賜はりました、夫から人呼んで吉岡無二齋といふ、毛利家に譽なお方、然れども御新造は既に世を去つて、男子兩人ある、嫡子を主水、次男を平馬といふ、吉岡は三千五百貫を賜はりまして、まだ此の時分には、石取にならない、百貫二百貫といふ時分、三千五百貫といふ御大身であるのに、二度目の御新造もお迎ひなく、二人の子の成人を樂しみにしてお在なざる、嫡子の主水は、學問は能くお出來なざるが、如何にも病身だ、武藝の方は餘り進みませんが、夫に引替て舍弟平馬は學問も兄より覺えも宜いが、就中劔術の早技なる事は

一同の者が到底叶はん、僅か十二三になる平馬を道場で對手にいたしまするが、誰一人此の平馬に勝つものがない、實に鋭どい早技であるから、毛利の御家中で、吉岡の小間鼠くといつて評判をして居る、夫が吉岡の耳に入つて、太郎左衛門伴の平馬に武藝を教えた事もないか、門前の小僧習はぬ經を讀むの譬で、何日しか彼が家中の者と對手になり、少しは竹刀の持ち方位を覺えていあらう、筋骨の固まらざる十五未滿の者に、到底腕前の出來る理由はなし、斯うお考がへになつて、平馬が十三の時、六月の中旬、太郎左衛門離座敷に書見をしてお在の所へ平「お父上、お茶を召上れ」目八分にお湯香を持つてお机の側へ進みまする、平馬が其所へ置く時に太「平馬、其方へ申付ける事がある」

平「何の御用でございませうか」
太「那れを見る、庭の日蔭の飛石の上に三毛猫が圓くなつて寝て居るであらう」

平「左様でございませう」

太「那の猫を、飛石へ疵を付けず、刃物に疵を付けず切つて見ろ」

先づ大概な子供なら、ヨリヤ御免を被むります、石へ付くか、刃物へ付くか

何方へか瑕が付く、夫を双方へ瑕を付けずに猫を切れといふ、断はるだらう

と太郎左衛門思召すと

平「委細承知いたしました」

袴の股立を摘み上げ、前付に差して居た七首、反を返して庭へソツと下りま
した、能く手前共の社會で、反を返すといふ事を申しますが、只反を返すとい

ふと、仲間の者は、大小共に上つ刃に斯う差して居る、夫を下つ刃に差し直
す、夫を反を返すと思ふ、之は大きな間違ひでございませう、反を返すといふ
のは、上つ刃になつて何れ大小を差して居る、夫を横に反を返すのだ、外刃
にコレ抜討をしやうといふのであるから、反を返すと申します、申上げるま
でもない、太刀は佩くといひ、刀脇差は差すといふ、刀脇差にはくりかたが
ある、太刀にはくりかたがないから、帯取といふものが付いて居ります、平
馬は爪先で飛石傳ひに、其の猫の側へやつて來た、之を武藝の方で、きよく
しやくを踏むと申します、どういふ鹽梅にやるかと、吉岡腫を離さず見て居
る中に、猫をシゲくと柄へ手を掛けて見て居た平馬、エイツといふて一聲
氣合を打つと、快い心持に寝て居た猫が、兩の眼を開いた、けれども御案内
の如く猫といふものは犬と違つて、眼を開く、直ぐに横つ飛に逃けるもので

はない、眼を開いてがら、四足を突張つて、脊中をムクムクと高くして、ブルブルと震はない中は、逃げないものであるが、今平馬の氣合に打たれて、四足を立つて、脊をヌツクリ高く上げた所を、抜手も見せず片手打に、猫を胴切スツバリと切つた、實に見事なもので、劔の刃にも瑕を付けず、飛石にも瑕を付けない

平「お父上、仰せの如く猫を切りました、如何なものでし

太郎左衛門心の中で感心して、此奴は實に非凡な件、此の太郎左衛門にも氣の付かない所である、天晴れなものだと心の中に驚ろいたが、されど賞めれば増長をして藝の妨たげになるから

太「成程」

と仰しやつたさき、別に賞美もいたしません、夫より四五日経つて、半道離

れて居ります萩の在、勝安寺村といふのがございます、茲に勝安寺といふ、吉岡の御菩提所で、伯父の泰山といふのが、此の寺の住持になつて居る、手前の家内の菩提の爲め、次男の平馬を出家得道をさせたい、どうぞ御坊のお弟子にして貰ひたいといふ泰山も易々と受合ました、吉岡先生喜こんで、新見といふ所へお戻り、此方は、長州萩の新見といふ所にお座敷がございまして、翌日になると

太「平馬、其方此の書面を持つて、勝安寺へ参れ」

平「畏こまりました」

平馬はお父上のお使に行くのであろうと思ひ、大小を差して勝安寺へお出にならんと、泰山住持

泰「能く平馬出て來なすつた、お前はモウ藩へ戻らんでも宜い、泰山に居つて

母の爲めに之から出家得道をいたすのだ、昨日お父上がお出になつて云々である」

驚ろいたのは吉岡平馬、坊主にされやうとは思はない、何所までも武藝者にならうと思ふ、其所を親が坊主にしやうといふのだけれども、親孝行であるから

平「誠に有難い事でござります」

といふので、夫から勝安寺へ留まり、跡から僕の彌助が、着類其の他の物を持つて参りました、之より勝安寺に、十三の時に入りまして、泰山住持が學問の様子を見ると、中々に似合ん學問が能く出来る、お經を教え、實に覺えが宜い、泰山も非常に喜こんで、先づ之は將來愚僧の跡取になりさうである、喜こんでお在なさる中に、平馬の兄の主水といふ方は、腰が抜けて了ひ

歩行に差支へるほどの始末、けれども吉岡太郎左衛門、決して平馬を元の如くにお屋敷へ呼ふといふ氣は少しもない、光陰は矢の如く、月日に關守なくして、吉岡平馬も早二十三歳になりました、此の時が天正十一年であります、愈よ世の中は騒々しくなつて、如何せん、此の時は亂世でげすから、不絶に戦争がある、然るに中國の探題、羽柴筑前守秀吉が、賤ヶ岳に柴田勝家を滅ぼしました、其の勢はひ破竹の如く、秀吉大阪へお入りになりました、所が茲に飛彈國、天城山の麓、天城村といふ所に、神傳有馬龍の棒の達者で、有馬喜左衛門信賢といふものがある、傲慢な奴で、故郷の土佐の國を立つて、豪家で工面が宜いから、金にはピシともしない、攝州大阪に乗出して、道場を開き、日本隨一の武藝者は我ならんと、自から高慢を並べて居る、道場を開いた其の看板は「佛道は釋迦に問へ、儒道は孔子に問へ、武道は我に問へ」

と認めて、其の下へ『土佐國天城村の産有馬喜左衛門』といふ看板、驚ろかないものはない、スルと秀吉公がお聞きになつて、不將千萬な奴だといふので、益田右衛門尉へ仰せ付けになりました、有馬喜左衛門を遂々大阪を逐拂つて了つた、逐拂はれた喜左衛門は、秀吉などいふ奴が、何を知つて居るものか、我が腕前を知らざるゆへ、我等を大阪を逐拂ふ、見ろ、我日本中の武藝者を片つ端より打負して、秀吉の荒胆を挫ひで呉れやう、夫に付いて天下に名高い武藝者は誰だらうと考がへると、長州萩の毛利の指南役、吉岡無二齋、イヤ此奴を負して驚ろかしてやらうと、向ふ見ずの傲慢な男だから、弟子八九人を引いて長州の萩へ乗込んで参りました、萩のお城下に軒を並べて居りまする旅宿へ一泊いたし、主人を呼んで

喜「時に主人、此の長州の萩で、毛利の指南役をいたして居る、吉岡無二齋と

スふのがあるから」

主「へエ在つしやいます」

喜「何所だ屋敷は」

主「へエ、新見といふ所でございます」

喜「さうか」

之から棒を持つて、吉岡の所へ立合に來ると、家來に伝附てあると見えて、只今御他出でお手合せがなりかねますといつて歸す、又翌日になると來たが毎でも會はない、所が喜左衛門旅宿の主人を呼んで

喜「吉岡といふ爺は、何日行つても留守だな」

主「へエ、那のお方は武藝の指南に番頭といふお役を勤めてお在なされるので、夫でお忙がしいのでございますせう」

喜「成程、吉岡は子供があるか」

主「へエ、ございませす」

喜「ウムさうか、女子か」

主「イエ、男子ばかり二人で」

喜「ハア女の子はないのか」

主「へエございませせん」

喜「ウム、男二人だな、幾歳位だ」

主「左様でございませす、どう考がへても、お兄上様の方が年が上でございませす」

喜「コレ、兄貴の年の上なのは極つたもんだ、何といふ名だ」

主「お兄様が主水と、仰しやひまして、御舎弟が平馬といふので」

喜「成程、此の兄弟は武藝が出来るか」

主「左様でげすな、私はマア町人で、精しい事は知りませんが、お兄様は學問

は能くお出来なさるが、劍術は餘り出来ない、第一腰拔でございませすから」

喜「ウム成程、不具者なんぞを持つて、太郎左衛門は因果な奴だ、平馬といふ

のはどうだ」

主「之は丈夫でございませす」

喜「チットは劍術は出来るか」

主「何でございませす」

喜「いやさ、平馬といふのはチットは劍術は出来るのかよ」

主「チットは出来るのかとは何です、チットどころぢやございません、大出来でございませす、十三の時に御家中で叶ふものがなかつたといふんですな」

喜「成程、夫は感心だ、幾歳ばかりだ」

喜「左様でございませう、只今モウ十五でございませう」

喜「ウム、夫は屋敷に居るのか」

喜「イエ、阿母さんの菩提の爲めに坊主となつて、此の萩の在の勝安寺に今小姓をして居ります」

喜「どうだな體格は」

喜「左様でございませう、色白で瘦ぎすの美男子誠に宜い方です」

翌日となると喜左衛門、勝安寺といふのへ出て参りました、懷中から取出した半紙へ書いたもの、持つて來た飯粒、上下へ付けて、門の親柱へベタベタ貼つて、其儘行つて了つた、門番か日の暮方、掃除に出て、門の柱を見て居た

が

門「オヤ、此んなものを貼て行きやアがつた」

ソツと剝して

門「吉岡の若旦那」

平「ウム、何だ」

門「今門の前へ掃除に出ましたら、此んな物を貼て行つた奴がおりますよ」

平「どれ見せる……何だ、佛道は釋迦に問へ、儒道は孔子に問へ、武道は有馬喜左衛門に問へ、日本一の大馬鹿野郎、吉岡平馬へと名が書いてある、よし、サア重助、之をお前貼て置いて呉んな」

自分の部屋へ入つて、サア〜と書いて
平「之を貼て置け」

重「此んな物を貼るといふと怒りませう」

平「ナニ、怒つても差支へない、之を貼つて置け」

喜左衛門八角に削り上げた檜の木の手棒を小脇に搔込んで、勝安寺へ来て見ると、門の所に紙に書いて貼てある

喜「何だ……佛道は釋迦に問へ、儒道は孔子に問へ、武道は我を以て師と仰

ぐべきものなり……何だ、拙者と同じやうな事を書いたな……斯く申

する者は、吉岡太郎左衛門の次男、吉岡平馬、日本一の大馬鹿者有馬喜左

衛門へハイ左様なら、又おいで……イヤ不埒千萬な奴だ」

兩の眼を瞋らし、ノツサ〜と玄關の所へ來り

喜「頼む、頼む」

大音聲に呼はる、役僧が参りまして、圓窓の所から透して見て驚ろいて

役「吉岡、往かんな、那んな事をいたしたから、有馬喜左衛門といふ者が怒つて來たよ」

平「ウムさうか、私が出てやらう」

木刀を提げて玄關へ出て來て、圓窓の蔭に木刀を隠し、ガラリと戸を開け、式臺へ腰を掛け

平「何所からお出だ」

喜「斯くいふ某がしは有馬喜左衛門といふもの、身共の事を日本一の馬鹿野郎

と、無禮千萬な事を申した吉岡平馬といふ小僧があるから之へ出せ」

平「ア、お前が有馬喜左衛門か」

喜「さうだ」

平「身共が吉岡平馬だ」

喜「ナニ、其力が平馬か……ウム、日本一の大馬鹿野郎の腕前を見せてやる、之へ出る」

平「宜し見てやらう」

喜左衛門襷十字に綾なし、汗止の鉢巻、八角に削り上げた櫛の棒をリウくと振廻す、和尚様も役僧も見て居たが、恐ろしい強さうな奴だ

和「オイ平馬や、怪我をすると往かんから止しなさい」

平「お師匠様大丈夫でございます、ア、いふ奴は懲戒てやらなければ往けません」

門前が勝安寺村の通りで、大勢の百姓が見て居たが、どうも強さうな奴だ

○「吉岡の若旦那お止しなさい、そんな奴とやつて、怪我をしちやアならねえ、恐ろしい長い棒だな」

平「ナニ、心配するな、軀より長い物を振廻す奴に碌な奴はない……」

喜左衛門益々怒つて

喜「不埒な一言だ、サア来い」

リウくと棒を振込んで、八相に棒を取つて、ヤツといふと身構へる、吉岡

平馬はニコニコ笑つて

平「サア来い」

短かい木刀を取つて、青眼に付ける

平「成程、自慢ほどには出来ん奴だな」
喜左衛門益々怒つて、八相に取つて居た棒、やをら吉岡の胸板を臨んで突掛る、ヒラリと體を左りに轉し、エイツと叫ぶ聲と諸共に喜左衛門手許へ、喜左衛門も打たれてはと思ふから、又棒を取直して打込み、體を轉して流れる

所を手許へ付入らうとする、テンで木刀と棒と打合はない、右に居るかと思へば左りに現はれる、其の早い事といふものは、實に目にも留りません、流石の喜左衛門も全身に勞れを覺え、鉢巻の上からメクメク汗が出る、眼は眩んで来る、喜左衛門太やかなる處の息を吐いて、エイツと飛込んで来ると、吉岡平馬、下から有馬喜左衛門の胸を木劍で忌といふほど突上げる、腰が浮いてるから堪りませんメグメグとメッラを踏んで行くと、仰向様に喜左衛門が倒れた、途端にお庭内の結構な松の木がある、其の松の木へ何所を打付たか、喜左衛門がウーンと其の儘氣絶をした、見て居た人達が驚ろいた

○「オヤ、遂々那の大きな野郎が死んで了つた」

門番が来て

門「オヤ死んぢまやアがつた……吉岡の若旦那死んぢまつた、早速穴を掘つ

て埋めませうか」

平「待て、穴を掘つて埋めちやア往かん、今息を吹返させてやるから」

喜左衛門の胸づくしを取つて、後へ廻つて、兩の手で喜左衛門の胸を撫で下し、抱込で、膝頭でエイツと活を入れる、喜左衛門は我心に返た、所を平ツ手でシヤリとイヤといふ程横面を叩た喜左衛門四邊をキヨロロ見て居る

平「コリヤ、シツカリいたせ、汝如き取るにも足らない腕でもつて、我が父無二齋に立合を望むといふのは片腹痛い、伴にさへ及ぶまい、今十年と十五年と修業をいたせ、武藝は死ぬまで修行だ之で宜いといふ時はないものだ

サア命は助けてやるから早く行け」

喜左衛門這々の體で棒を持つて鼠の如くに逃げて了つた、勝安寺の和尙が胆を潰して

和「イヤどうも平馬お前は太刀能く剣術が出来来る、何故そんなに剣術が出来来るのに武士にならんといふのだ、兄主水は腰拔で役に立たんが、何故父無二齋殿の跡を相續しなす」

平「夫はお師匠様往けません、私はどうか武藝者になりたいと思ふが、父がして呉れまん」

和「夫は吉岡先生も御了簡違ひ、愚僧が明日新見に参つて、親人に對して掛合つてやるから武藝者になんなさい、あたら腕前を勿體ない」

武士になれるといふのだから吉岡平馬天にも昇る心地で喜こんだ、其の翌日丁度在方の大盡の御法事がありました、何だ彼んだといつて、刻限が後れました

和「平馬、チト刻限が遅いが、別段差支へないから参らう」

平「ハイ有難ふ存じます」

と勝安寺を連立つて出たのがモウ夕景でございます、お師匠様の跡に付いて大小を差し、勝安寺村を出外れると、茲に六町の松並木がある、之を出外れると、土橋がある、夫から萩の小路といふ、兩側に一面萩が植つて居る、夫から新見といふのへ掛る、松並木へ掛ると、覆面頭巾に黒装束、松並木の蔭から、吉岡平馬を臨んで、眞向二ツと切付ける、ヒラリと體を開いたが早い

平「無禮者ッ」

抜く手も見せず夫へ首を切つて落した、和尚様が驚ろいた、どうも斯ういふ所へ來るといふと、和尚様は何の役にも立たない、松の木の根へヒヨコンと座つて了つた

「ソレ一人やられた」といふ聲が掛ると、右左から切込んで来る、心得たりと平馬、飛違ひざまに一人の鳩尾の邊りへ突を掛ける、今一人を返す一刀に、下腹よりいたして、右の高股のあたりまで切下げたから、ドーと倒れる

「コリヤ中々手強い小冠者だ、ソレ討取れ」

と掛る時、此方の松の木を小楯になし、エイツと一人切つたと思ふと、今度は、先方の松並木へ行つて小楯に取る、大勢を切るには、一ツ所では切れません、我身を圍ひ、逃げぐ敵を切るのが、之が當然だ、中々腕前のすぐれた小童だと思つて、残つてる所の者が、双方一度に来る、一番太い松の木を小楯に、サア来いと切結んで居る、有馬喜左衛門、見る／＼中に、我弟子五人を切り倒され、不敵な奴と、卑怯未練にも、平馬の後ろへ廻り、大刀を真

向に振振り、平馬を切つて捨てやうと、松の木の後ろへ廻り、切らうとする、先方は身體を轉す、右を狙へば左りへ轉し、左りを狙へば右へ轉す、喜左衛門マゴ／＼して居る。

第二席

所へ左りに笠を提げ、分擔げの荷物、スタ／＼、畔から畔と傳つて、勝安寺の松原へ出て来る一人の旅武士、まだ暮れて間もなき小松原、松の木の間に洩れる星影に、透して見れば、黒装束に覆面頭巾、さては物取り、剽盜か、目に物見せて呉れんすと、笠の上に荷物を置き、手早く掛ける禱十字、一刀の柄に手を掛け、ギテリと引抜き、見ると、今四人を對手に切結んで居る小僧の後ろから切らうといふ、怪しからん奴と、巾二尺ばかりの清水の流れ

居る溝があります、夫をヒラリと飛越して、彼の旅武士、有馬喜左衛門の後ろから

武「エイッ」

一喝叫んで切り下す一刀、何條堪るべき、喜左衛門の首はゴロリと落る、正面の四人は驚ろいて

「ッレ、師匠がやられた」

といふと切先が亂れた、踏込んだ平馬、正面の一人を腦上より頤の邊りまで切り落し、右の一人を袈裟掛けに、残る二人は雲を霞と逃げ去る、流石の平馬も眞劍勝負は初めて、身體疲れ、口を利く事が叶はん、之は當然だ、少しも無理のない所だ、臆て清水の流れで居ります溝際へ来て、左りの手で水を掻い上げて口を洗ひまして一口呑み

平「之は何れのお武家か存せんが、危い所へ御加勢下し置かれて辱じけなふござる」

武「イヤ汝は若ひに似氣なき腕前、拙者感服をいたした」

勝安寺の住持は早腰がぬけて起つ事が出来ない、其所へ覺り出してお出なすつたが

和「イヤ之はくどうも貴所大きに有難ふ存じます」

武「ハ、ア、お見上げ申せば御出家、之は貴所の御子息でございますか」

和「イエ愚僧の子ではございませぬ、十三の時より愚僧の弟子にして置きました」

武「成程、寺の和尚の子としては、腕前見事であると思得たが、さては吉岡無二齋殿の御次男とな、成程左もあるべし、さもさうあらう、日本無双の吉

岡無二齋殿の御子息なら此の位ななお働らきはありがちな事だ、甚はだ申後れて相濟まんが、手前は加藤清正の家來、宮本武左衛門と申する者、此度主人に向ふ五ヶ年の暇を貰ひ、武藝修行に出ましたたが、段々中國筋へ來るに從がつて、吉岡先生の御高名、お目通りをいたして、一本の御教訓に預かりたいと存じ、萩の城下を差して参りましたたが、近道を教はつて、丁度茲へ通り掛つた、能き折柄のお目通り」

イヤ和尚様も、平馬も秀吉公の御家來、加藤の宮本武左衛門、誠に結構な武藝者、之から我々も新見へ参りますからといふので、平馬は大刀を手拭で拭いて鞘に納め、同じく武左衛門も劔に拭ひを掛けまして鞘に納め、死骸は何れ長州萩の家來が取片付けますから、此の儘にいたし、新見へ歸つて無二齋に右の話しをいたし、吉岡殿から毛利の家來、役々の者に言ひ付けて、彼の

有馬喜左衛門主従の死骸は残らず取片付けまする、尙々平馬の評判は毛利の家中に高まつて参りました、時に此方は泰山和尚が

和之だけに腕前の出来るものを、坊主にするのは勿體ない、嫡男主水は腰抜けて役に立たんから、元々通り當家へ置いて、先生の跡を繼したら宜しからう」

といふ、吉岡太郎左衛門が

太「誠にお志ざしは忝じけないが、餘り此の平馬は何事に付けても鋭どいほど氣が廻る、若し吉岡の家名に瑕を付けるやうな事があると、お主に濟まんだがゆる坊主にいたしたいとお頼み申上げたのだ、拙者の跡目は要らんだらぞ拙者の望み通り平馬を出家にして貰ひたい」

和「イヤ夫は先生の卑屈といふものだ、名人に二代目なしといふが、先生の御

子息に斯様な平馬の如きものが、出来るといふのは、是天下の譽といふもの
のだ、夫を出家にするといふのは勿體ない、愚僧中々出家には仕つりませ
ん」

吉岡と泰山の話しを次の間に聞いて居た武左衛門

武「甚はだどうも御主人と住持と議論の間へ口を出して恐れ入りますが、先生
の仰しやる所も一應御尤もにございます、亦お住持の仰しやる所も一々
道理、御無理のない所と存じます、夫に付けて先生がどうしても出家にし
なければならんといふ、お住持はしないと御しやる、如何でございませう、
手前妻がないから子が無い、甚はだ慾張つたやうで恐れ入りますが、此の
御次男を拙者に頂戴いたす事は出来ませうまいか」
吉岡太郎左衛門

太「コリヤ上げられない、吉岡の家に瑕を付けるものと見たから坊主にしやう
といふ、若し宮本家へ對して差上げて、瑕でも付けた日には相濟まん」
武左衛門笑を含んで

武「決して差支へてございませぬ、手前に下し置かれますれば、宮本家を潰さう
が、瑕を付けやうが、些とも厭ふ所はございませぬ、どうか頂戴いたした
い」

泰山も之を聞いて

和「結構だ、先生、早速此の宮本氏にお遣しなさい、失禮だが貴所は餘り卑屈
過ぎて往けない」

斯う泰山にいはれたのは、全く此の吉岡といふ老人は、劍術は名人だか知
らんが、一寸した所に癖がある、之が太郎左衛門が、我が子を見る事親に如

ずといふが當になりませんな
 太「然らばお望みに任して差上げませうが、手前の所は勘當をして進せる」
 武「結構、勘當であらうが、勘當でなからうが差支へない、頂戴いたしたい」
 と茲で武左衛門が約束をした、此の吉岡太郎左衛門、勘當をした伴に後に敵
 を討つて貰へば誠にハヤ仕合せだ、其の位なら勘當をしなければ宜い、泰
 山は喜んで勝安寺へ戻ります、武左衛門は五六日滞在をする中に、伴に
 目録を許して、吉日を選んで長門國萩を立ちました、時に天正十三年、秀吉
 公は正一位關白太政大臣に上られ、加藤主計頭清正は播磨國網代に於て高五
 萬石ソコで、平馬と共に播州網代へ戻りました、我が小屋に着いて、さて清
 正公へお目通り、時に加藤清正が
 清「其方は向ふ五ヶ年の暇乞ひをいたして、武術修行に出で、未だ二年経ざる

中に立戻つて参る、如何いたした

武「御意にございます、最早私は武藝の修行をいたしますには及ばん、其の
 理由は此度長州萩へ参りまして、毛利の臣、吉岡無二齋に面會をして、無
 二齋の次男、平馬といふものを伴に貰つて参りました」

清「ア、左様か、日本無雙の無二齋の伴、定めし腕前が出来やう」

武「恐れながら腕前の出来まする事は、手前などは遠く及びません、誠に黄金
 の玉を得たるが如く」

清「夫は、何より重疊である、然らば其の平馬を呼べ、目通り申付け」

武左衛門喜んで退つた、跡で近臣の御家來、井上、木村なんぞが、武左衛
 門無暗にどうも賞めて居るが、餘程良い伴を貰つたと見えるな、待つ間程な
 く武左衛門同道をして、御前へ出た、人々が見ると色白で瘦ぎす、武藝者

とは受取れない、平馬麻上下を着け、叩頭をして居る工合どうも、襟元の奇麗な事

清「武左衛門、其所退け」

清正は傍へに居る井筒女之助へ差圖をなすつて、備前助貞の片鎌の槍を取つて、ビマリと上段より踏出し

清「コリヤ其方が吉岡平馬か、ウム天晴れ武左衛門の養子たり、予が清正であるぞ、苦しふない面を上げる」

武左衛門は驚ろいた、伴が頭を上げれば槍で頭を突かれる、吉岡平馬の頭の上へ槍が出て居る、どうしたもんだらうと武左衛門心配をして居ると、平馬は両手を仕へ、頭を下げ

平「お目通り仰せ付けられ、有難い仕合せ」

と盥を兩の手で叩くかと思ふと、足を伸して、座つたまゝ、六尺ばかり後へ飛下つたが、其の早い事、ヌツクリ頭を上げ、膝に両手を上げ、胸を突出し、願はくば手柄に突き給ひといはぬばかり、清正大きに感心して

清「コリヤ平馬、其方は如何いたして頭上に槍のあるのを知つた」

平「参候、初見参りのお試あらんと存じ、お手許をば窺がへば、上槍を以てお試し、上半を取られたれば、繰出すべき槍は三尺より伸ず、六尺離れ、ば我身に別條なしと存じ、御無禮を顧みず、六尺離れました」

清正公右手に槍を突立つて膝を丁々と左手に打ち

清「ア、武者者は斯くこそありたい、如何にも武左衛門其方は良い伴を持つて仕合せぢや、併し吉岡より宮本家へ來れば、吉岡の伴を捨て宮本を名乗るべきもの、今日より改ためて宮本武藏となれ、名乗をば政名と遣はす」

茲で宮本武藏政名、此の武藏といふ字は武藏と同じて、只讀聲が違ひましたので、後に敵を討つ首途に

清「汝の藝才は武藏の月を明らかに見る如くであるから、武藏と改名をし」と仰しやつて、清正公が宮本武藏政名と改名をいたしましたのでございませう、此

の時は武藏政名といふ、イヤ武左衛門上々の首尾で喜こんだが、さて此の武藏、父の勘當をされて養子にやられたのが如何にも残念、我生涯武藝で世に出んとする、何か己れで非凡な事を見出したいと摩利志尊天へ大願をたゝんだ、

處が武藏の心願空しからず、或夜の事、摩利志尊天、猪の背に跨がつて出現、二人の童子を左右に従がひ、汝武藝の極意を得んと心願を籠る、今汝に武藝の形を教え遣はすと、猪の脊より下り給ひ、左りの手には一尺八寸の短劍、

右の手には二尺三寸の長劍、右劍左劍を左右に取つて、二人の童子を

對手に、左右の構ひ、天地の構ひ、前後の構ひ、十字の切止め、之を其の宮本十八段返しといひます、出沒自在に二人の童子を對手に二刀をお使ひなさる、武藏之を拜し、

武藏「誠に有難や辱じけなや……………」

武「オウ〜武藏や〜」

唐紙を叩き

武「大層呻されるやうだな」

武藏「ハイ」

父に襖を叩かれて見ると四邊は陰々として居る、襖を開けて

武「オヤまだ寝ないのかい、寝な〜、机へ寄り掛つたまゝ寝るから呻されるのだ、氣を付けなさい、床を何だ早速敷かしてやらう」

武藏「イエ有難ふ存じます、どうぞお構ひ下さるな」

武左衛門は手の掌の玉のやうに喜んで居る、さて武藏は父に知れんやう、嗽手洗をして摩利志尊天へお禮を申上げる武左衛門は、清正公が勝手勤めをさせて呉れるので、今日は武左衛門谷城をして居る、其の跡で自分で短かい木刀と長いのを持出して、道場へ出て夢の中に教はつた形を使つて見ると、どうも實に見事だ、土臺此の左りが右より強い、右より左りが強いから二刀が使へるのでございます、之はどうも結構だな、大満足をして居る、所へお弟手がやつて参りました。

○「若先生、まだ大先生は御下城はございませんか、大先生の御不在中、一ツお稽古を願ひます」

武「ア、左様か、お稽古をいたすほどの腕前はないが、今日は甚はだ恐れ入れ

るが、ナト變つたお稽古をいたすが、手前は二本のお稽古をいたしますから」

甲「二本で……へエー成程、二本は結構で……」

此から宮本武藏が、二本で以てやる、短かいのと、長いので

武「サア入つしやいまし」

武藏、足をもろに揃へて立つて、左右へ木刀を下げて、打込んで來るといふと十字で受ける、其の早い事、押さうとすると、シンワリ受けて退る、引かうとすると付込む、弟子が

○「恐れ入りましたな、何日の間に斯様な又流を御工夫になりましたか」
どうも恐ろしいもので世の中に又流といふのはない、サア之が評判になると若侍が不絶に來てやる、武左衛門が聞いて

武「武藏や」

武藏「ハイ」

武「お前は何か二本でもつて若侍へ稽古をするさうだ、往けないよ、止しなさい、一本の竹刀木刀でさへ自由にならんものを、二本持つて稽古をするといふのは能くない、烏丸の歌に世の中はかくもありたし猿の手の右り伸びれば左りみぢかしのいふ戒しめがある、天二物を興へずといふから……」
武藏「恐れ入りますが、手前が工夫をいたしましたので、二本が勝つか負けるかやつて見ませう」

武「ウム宜しい、サアお出で、親子として藝道に區別はない、面取れば親子なりけり寒稽古、決して親だから子だからといつて遠慮をして居られんのが此の武藝の道だ、透があれば武藏やお出でよ」

武藏「へ宜しうございます」

ヤツと左右へ別れて身構へる、武左衛門青眼に取つて武藏を見ると、木剣をブラ下げて身構へる

武「オイ〜武藏」

武藏「ハイ」

武「ハイぢやない、世の中に鉢と面を圍はん劔術といふのはない、お前のは頭から爪先まであけすかした」

武藏「之を結構なんで」

武「之で結構……訝しいな、打つよ、宜いかい」

ヤツといふと打込んで来る、右足が一足踏出したかと思ふと、武藏ガツキリ受けた、十文字、其の早い事、お弟子が見て居て

「ソレモウ駄目だ」

武左衛門驚ろいた、押さうとすると退る、引かふとすると付込む、サア武左衛門勝目がない、木剣を投げて

武「イヤ参つたく、旨い事を工風をしたな」

益々武左衛門喜こんで御前へ出ると、伴の自慢話しばかりして居る、時に吉岡無二齋が、岸柳の爲めに敢なき最期を遂げる、宮本氏が國表出立をするといふお話し。

第三席

吉岡太郎左衛門が長州家に無事に勤めてお在るが、如何にも先生、御老人であるから、壯健なやうでも、追々に身體が思ふやうに動く事も出来ん事が

あります、ソコで毛利の當主、中納言輝元、此の方は大炊元就公の嫡子、隆元のお子であります、大炊元就の次男が吉川駿河守元治、三男が小早川左衛門督隆景、隆景は前名を助十郎と仰しやつた方、元就死去の後、彼の隆元の悴、輝元を以て毛利家相續をさせ、吉川小早川の兩人が後見をいたしました此の事に付ていろく講談もございしますが餘事ゆる茲には大略をいたします、輝元非常に吉岡を愛してお在るがゆゑ、五十日といふお暇が出まして攝州有馬へお出でに相成る、僕の彌助をば連れまして、池の坊に宿を取り、身體の保養をいたしました、大きに壯健になりましたから、茲で長州萩へ戻らうと云ふので、僕の彌助を連れて立戻ります途中、姫路革を求めやうと、播州姫路へ立寄りました、姫路の御城下茗荷屋といふのに宿を取りまして、茲に一兩日逗留をいたし、姫路の町を見物しやうといふ心算、流石姫路

はこの頃は、豊臣秀吉公の甥御、木下若狭守勝俊殿御高八十三萬石の城地でありませ、然るに、吉岡先生の家來彌助は、至つての正直者、小供が好きでございませから、茗荷屋の小供が誠に馴染んで、朝夕是を遊ばしてやります相變らず彌助、小供の手を引いて、町中を諸方歩いて來ると、一軒の家の塀内から往來へ枝が出て、青柿が鈴生りになつて居る小供の事であるから子「伯父さん、大層柿が生つてゐるせ、那の柿を取つてお呉れな」彌「坊や、那の柿は他處ので、澁ッ柿で一ツも食べられないから、今に伯父さんか、良いのを買つてやらう」

子「そんな事をいはないで、取つてお呉れよ」

彌「夫ぢやア、マア取つてやらう」

と石を拾つて彌助が、柿へ狙ひを付けて、ヤツと石を投げると、石は柿へ當

らないで、木の間を潜つて庭の内へ飛んで行く、此の家は、何者の屋敷かといふに、町道場を張つて、木下家より五百石の扶持を戴いてゐる佐々木賢東齋岸柳の住居で、丁度師範代で、押田佐吉が、今代稽古をいたし、稽古着を脱いで、鹽へ水を汲ませ、顔を洗つてゐる所へ、右の石が飛んで來て、押田佐吉の頭へ打付かつた、何んな劍術遣ひでも、下を向いてゐる所へ、外から飛んで來た石だから、轉す間がないので、コッソリと頭へ當つたから、押田佐吉驚いて塀の裾から見ると、表に草履を穿いて、立つてゐる者がある、佐吉聲を揚げて

佐「若武士衆、塀の外に柿泥棒がある、捉へなさい」

と呼ばれば、彌助此の聲を聞いて

彌「ソーラ大變だ」

と小供を脊負つて逃げ出す、後から若武士が大勢追駈けてくる、其の内に彌助、茗荷屋の家へ飛びこんで了つた、後から若武士が五六人、ドヤ／＼這入つて来た、

若主人、唯今當家へ小供を脊負つて這入つた者は、此の家の召使か但しは泊りの客か、先生のお庭の柿を取らうとて、石を磔に押田佐吉先生の頭へ打付けた、サア之へ出せ」

主人は驚いて

主「私の所へお泊りのお客様か、當家の者が存じませんが只今見えません」

若「黙れッ、見えんことはない、當家へ這入つたに違ひない、愈々出さんとなれば面倒だ、此奴を擔いで行つて了へ」

と遠慮會釋もあらばこそ、腕自慢の若武士、茗荷屋の主人を大勢で擔ぎ、岸

柳の屋敷へ連れて行つて了ひました、サア是が爲め、家内中の大騒ぎとなり吉岡御老體書見をしてゐたが、余り家が雑踏をするから、何うしたのであらうと尋ねれば

○「只今コレ／＼でございます」

と女中の話

太「夫はどうも大變、彌助……彌助」

お呼びなされると、彌助は家へ飛込んで、子供を投り出し、台所 竈の蔭に隠れて居る、主人の呼聲に彌助、夫へ出て参り

彌「へエ何御用で」

太「何御用ではない、彌助、其の方は石を投り込んで来たのであらう」

彌「左様でございますまして當家の忤か、柿を取れ／＼といひまするから取つてや

らうと存じまして、手が狂ひ石が庭へ這入りました」
太「夫は往かんな、當家の主人が連れて行かれて了つた、宜しく、拙者が貰つて來やう」

と家内中を鎮めさせ、女中に云付けて菓子折を求めさせ、是を若荷屋の若い衆に持たせ、細身の大小籠甲竹の杖を突いて、佐々木岸柳の屋敷へ出て参りまして

太「お頼み申す……御免を蒙むる」

○「ドール……」
一人の門弟が出て來た、見ると、色の白い小兵な人物の宜い老人が立つてゐるから

門弟「何れより……」

太「是は、お取次御苦勞にござる、賢東齋先生御在宿なれば宜しう、是は甚だ失禮でございませうが、手土産の印ばかり、手前は、吉岡太郎左衛門と申す者、宜しうお傳へ下さるやう……」

弟子は驚いて、日本に二人ないと云ふので、其の名、無二齋と足利十三代將軍義輝公より名前を賜つたる大先生、武邊社會に於て、吉岡無二齋の姓名を知らんものはない、早速奥へ入り

門弟「先生、只今吉岡太郎左衛門先生、御尊來で是は手土産の印ばかりだと下し置かれました」

岸柳聞いて驚いた

岸「何で吉岡無二齋が來たのであらう……兎に角、最上町嚙に通せ」
といふので、一間の内へ案内をいたし、茶を出し、菓子を出す、それに寒い

時分でないから、煙草盆などを出して待遇まする、所へ岸柳、衣服を改めて出て参り

岸「是はく吉岡老先生には、宜うこそお尋ね下し置かれ、千萬辱けなうござる、拙者、お尋ねを蒙りましたる岸柳にございます」

太「岸柳先生、初めてお目通りをいたす、手前が吉岡無二齋今日伺つたのは余の儀ではござらん、拙者家來が宿の茗荷屋の倅を同道いたし何か御庭内へ石を投込んだので、御門下御立腹に相成り、宿の主人を御當家へお連れに相成つたる由にござる、如何にも、御立腹の段、御尤もではござるが、何卒御勘辨に相成らば忝けなう存する」

岸柳少しも知らないのであるから
岸「コレ、只今お話を承つたが何故左様なことをいたす、早速、茗荷屋の

主人を返して遣はせ」

弟子も無二齋に謝りに來られては面目ないによつて、直ぐに茗荷屋の主人は宿へ返してやりました、時に、岸柳は傲慢無禮の奴だによつて、是は宜い時に無二齋に面會をいたした、是を機會に、無二齋と一本立會をいたし、幸ひに此の梅干爺を打込んだら、我が名前も天下に響き渡るであらうと、心の中に考へ

岸「さて吉岡先生、幸ひに拙者お目通りいたすことを得まして、此の上の喜びはございませぬ、就いては、何卒一本のお手合せを願ひ度いものにござるが、如何でございませう」

無二齋は、岸柳に立合ひを好まれるのが忌だに依つて、今まで茗荷屋に泊つて居ても、人に知れないやうにしてお在でなすつたが、武者の事だから、

立合ひを望まれると、厭だといふ譯には往かん、併し、こんな物と立合ひ、勝つて意恨を受けては詰らんと思召したから

太「御尤もなるお望みでござるが、老年に及んで、無二齋お對手にも相成るま

い、殊に身體悪しくして、御主君よりお暇を戴き、有馬へ湯治に参つた戻

り掛け、私に立合ふ譯にもならず、主人の許しを受けなければならんによ

つて、何れ亦其の中に、御縁もあらば、お手合せに願ふ事にいたさう」

と斯う云つたら岸柳が、さう手憶劫な事であるなら、又願はふといふであら

うと、思ふによつて、體裁よくお逃げなすつたが、土臺、岸柳は上見ぬ齋の

振舞、大天狗の奴だから

岸「成る程、御尤も千萬、主の許を受けんければ、お手合せが出来んと仰せある

ならば、拙者も是より御主人へ願ひまするから、老先生も御主人へお届け

の上、お手合せを願ひたいものでござる」

斯う云はれて見ると、夫でも出来ないといふ譯にはならんから、止むことを

得ず無二齋先生、承諾をいたして茗荷屋へ立戻り、書面を認め彌助に持たせ

長門の萩家老の宍戸、花房兩名の許へ是を申し送る、吉岡の書面を見て兩人

早速に太守毛利輝元公の御前へ出で、右の次第を申し上げると、輝元公大い

に怒つて

輝「憎む賢東齋の願ひ、速やかに其の方共姫路へ下向をいたし、美事無二齋

に岸柳を打負して立歸るやう、立合ひを許し遣はず」

と、そこで、宍戸備中、花房志摩守、輝元公の仰せを蒙むり、大勢の家來を

連れて、長門の萩より播州姫路へ乗り込んで参り、茗荷屋へ到着をいたしま

した、此方は佐々木岸柳、木下若狭守殿へ、吉岡無二齋と手合せの次第をお

届げに及ぶと、固より愚將の木下勝俊殿、岸柳より外に武藝者はないと、思つてゐる方だにより、手合せをいたせと云ふので、速にお許になつたから、支度をいたし待つ所へ、毛利家から宍戸花房が乗込んで参り、木下殿へお届けになると、毛利の兩家老が來つたのであるから若狭守殿の家老木下將監といふ者が、自身、名荷屋へ赴き、宍戸花房に對面をいたし

將「御兩所には此の度、遠路の所、當地へお乗込み、御苦勞千萬、岸柳傲慢にいたして、要なき立合ひを吉岡先生に望み、お氣の毒の段お察し申す、就いては、御城内へお供をいたしませうか、但しは當家に御宿泊をいたされ

まするか」

と尋ねた時に、宍戸備中が

備「木下氏のお言葉、千萬辱けなう存する、御城中へ罷り越し、要なき事にお

手厚き御待遇に預かるも心苦しければ、此の儘當家に在宿仕るでござら

う」

將「然らば御心任せに」

と、木下將監は是より立戻り、萬事、將監が係りで、宍戸花房に夫々待遇をさせまする、城内へ來ないからと云つて構はずには置けません、茲で、龜山といふ所へ、矢來を拵へまして、此の内立合ひをさせやうと云ふので兩方へ幕を張り、棧敷を拵へ、見物勝手次第といふのであるから、近郷近在奮つて此の立合ひを見に参る、初當日に相成ると、岸柳は天地人の弟子を連れて其の場に出張をいたしまする、第一番に澤田空右衛門、押田佐吉、青山文平といふ右の三人、幕の内に扣へて居ります、此方に吉岡太郎左衛門、幕の内

の床机に掛つてゐる、お棧敷には、木下若狭守勝俊殿、家老木下將監、毛利

の家老、宍戸備中、花房志摩守、其の他木下家の重役ズラリと並んで、勝負如何にと見て居ります、兎角する中に、時刻來つて太鼓を打ち、幕の内より立出でたる佐々木賢東齋岸柳、切下げの頭は後ろ鉢巻、黒の紬に四つ目結の五つ所紋、仙臺平茶の華鬘の袴、股立ちを高く取上げ、鐙元二尺五寸柄前八寸、總體三尺三寸肥前の國大村櫓を蛤齒に削上げたるのに、鐵の丸鐙打つたる木劍を提げて、夫へ立出でる、吉岡太郎左衛門無二齋先生は、茶の龜綾の袷小倉の袴を穿きまして、短い木刀を取つて、是も襷鉢巻の支度で、夫へ立出でる、數多の見物、矢來の外にあつて、ワツ／＼と鯨波の聲を揚げます、岸柳は大兵なり、吉岡は小兵であります、互に黙禮をいたし、

と云つて、エイツ、ヤツの氣合諸共左右にサツと開いて岸柳は青眼に木劍を

直し吉岡の様子を見るに、太郎左衛門無二齋、左の手は袴の腰に當て、右の手にてシリ／＼と星眼につける、鶉の毛でついた程の隙もない日本名代の吉岡無二齋、岸柳、心中に來るほど美事な腕前だと、一流の指南をするほどの賢東齋ゆゑ、對手が見へる、吉岡は、岸柳の様子を眺め、心中に、是しきの技倆を自慢に三界一無敵流など、流名をつけ、勝手我が儘の振舞をする、片腹痛い奴だと思ひ、懲戒のため負かしてやらうと、シリ／＼と付込んで來る、年は老つても、其の術に渡つてゐるゆゑ、氣合で責められるから岸柳は自然と臆れが參る、ヤツと一聲氣合を討つて、吉岡無二齋飛込んで來たその早い事、眼にも止らず賢東齋の右の小手を、したゝかに打つた、尋常の者に打たれたのではない、名人の吉岡に、小手を斜に打たれたから、總身へビリ／＼と響き、思はず岸柳腕の締りが緩んだるか、木劍をガラリと夫へ捲落

され

岸「參つた」

一本も合せないと云ふ美事な勝負、見物一同矢來に捉り、鬨の聲を揚げて、岸柳を罵ります、又た、吉岡を賞める、花房、宍戸の兩人は、棧敷で見物をしてゐたが

兩人「態ア見ろ、小供のやうぢや」

と、鼻隆々としてゐる、木下將監は、岸柳の負けたのを見て

將「宜い氣味だ、態ア見ろ、馬鹿野郎、何といふ負け方だ」

と常々、岸柳の傲慢を憎んで居るから堪らない、流石に御最負でも木下若狭守、岸柳の負け方が呆氣ないので、赤面をいたしました、扱宍戸花房の兩人

は吉岡を連れて一旦茗荷屋へ引き取り、木下家へ暇乞ひに及んで、ソコ

に長門の萩を指して立戻りました、時に岸柳は、満座の中に耻辱を受け、如何にも残念であるから、木下若狭守殿御前へ出で、

岸「拙者、未熟にいたして、吉岡無二齋に打負けましてござる、願はくば、三年のお暇を頂戴なし、武藝修行の上吉岡無二齋に勝る技倆になつて立歸り

まするにより、御聞濟みに預りたう存じまする」と明かに暇を貰ひ、屋敷は澤田、押田、青山の三人に頼んで、是から播州姫

路を發足に及び賢東齋諸國修行とは眞赤な偽り、一直線に長門の國萩を望んで乗込み來つたは、意恨を含む吉岡無二齋を討つて、我が無念を露さんとい

ふねじけ根性の岸柳、尤も此の賢東齋といふ者は、前名を六角甲斐藏と申し、塚原卜傳の弟子でございます、師の卜傳先生が、丹誠を凝して教へやり

ましたので、當人の技倆も段々上達をして、一人前の武藝者に取立つて遣さ

んと、ト傳先生、肩を入れて居た内に二十五歳の時此の岸柳が、六角甲斐藏の昔、師匠ト傳の前に誓を刎ねて

甲「私は最早武藝が厭になりました、是から、諸國を修行いたして、兩親の誓提を吊らひ、法師となる心得でございます、今まで御厚情に預りましたか御機嫌宜しう」

と、弟子の方から師匠へ坊主になるから、破門をして呉れといふ心得違いの奴、流石の塚原ト傳も、今まで仕込んで、天晴れ武藝の方では、一人前になつたのだが、坊主になると云はれては、夫までの事であるから、止むを得ず六角甲斐藏に暇をやりました、師匠ト傳の前には、坊主になると己れが勝手に縁を絶つて成るほど、頭だけは、坊主になつて、師匠ト傳を後ろにして是から武藝の修行をして歩く内に、頭の髪の毛が伸びて参ります、其の修行中

に、六角甲斐藏、或る日、長旅の疲れに、土手岸の小川の邊りに、柳の大樹があります、夫へ腰を掛けて、水面を睨んで居つた所が、宜い心持に相成つてウツテと睡氣を催して來ます、と、己れの頭へ、パラ／＼と障つた物があるので、甲斐藏ハツと我れに返り、氣を取り直して、八方へ眼を配つて見たが、何も居るといふ様子が無い、氣が注いで仰向くと、柳の枝が垂れてゐるのが、我が頭へ當るを、甲斐藏しげ／＼眺め

甲「成るほど、武藝の悟りは此處だ、風に打たれて柳が下り、我が頭に當つたのか」
と、茲で我が名前を、佐々木岸柳と改め、賢東齋と齋號をつけまして、佐々木賢東齋岸柳、ト傳流では、若し師匠塚原ト傳に聞かれた時に、面倒ぢやによつて、己れが勝手に「三界一無敵流」といふ流名をつけ、諸國を修行いた

して居る内に、播磨の姫路へ來つて、木下若狭守に仕へて居つた、之が、賢東齋岸柳の成立でございませす、されば無二齋の負けたのが残念だから、吉岡を討たふと、長門の萩へ乗込みますのお話し

第四席

茲に天正十七年八月十五日、萩の勝安寺村の勝安寺に月見の宴を兼ねて圍碁の手合せがあります、吉岡太郎左衛門と住持泰山とは合ひ碁であるに依つて、其の餘の若武士も皆勝安寺へ出向いて參ると云ふ、吉岡先生支度をして御往でにならうとすると、嫡子の主水は腰が立たん、漸くにして襖を開いて其れへ立ち出で

主「父上、是から勝安寺へ御出掛になりますか」

太「されば」

主「願はくば今日勝安寺へ御出では御止め遊ばして頂き度い、と申しますのは、昨晚拙者が見た夢が如何にも氣になります、其の夢と申すのは一つの細い流れがあつて、沿岸に柳の木がございませす、爲ると一匹の羊が東方より西方を望んで走つて參りました、彼の柳の木の傍を走つたと見ると俄に柳の木が倒れて、羊を壓し伏せたと見て私は眼が覺めました、此の夢を判断致しますと、御父上は羊の御年、岸の柳は岸柳と書く、もし當日龜山の立合ひに負けたるを意恨に心得て岸柳が父上を付け狙はんとも限りません、如何にも不思議な夢でございませすから御止まりを願ひ度い」

主「水の見た夢は全くどうも正夢、平生は斯う云ふ事を聞けば恐ろしい擔ぎ屋の太郎左衛門、けれども此の方の命数が盡きたのか」

太「イヤそれは主水、お前の心の疲であらう、夢などが常になつて堪るものか、決して心配するには及ばん、マア留守居をして呉れる」
 と僕の彌助を連れまして勝安寺へ、正午に垂々たる頃御出になりますと大勢の若武士も集つて居ります、さて是より各々手合ひを極めて勝負に掛りました

碁敵は憎さも憎しなつかしく

俗に親の死目にも逢へないと云ふのが此の碁ださうでありますか、當今の時計にしまして午後の三時半と云ふ頃、俄に曇り出し雨が烈しく降つて参り、雷が非常に鳴り動きます、暫時の間休憩して、各々御茶を飲みながら「イヤどうも烈い雷雨で………」
 話しをして居る内に夜の五ツ頃になると、雲は晴れて雷も遠退きまして、八

月十五夜の月は玲瓏として照り渡る

太「さて御一同、甚はだ中座をして濟まんが御存じの忤主水が蹇であるから、老人は一步御先へ御免を蒙る」

○「先生御歸りでございますか、吾等が御送り申しませう」

太「何んの遠い處ではなし、馴れたる道、殊に彌助も居れば決して送るには及ばん、マア各々は御後より」

○「然らば先生御免を蒙ります」

吉岡は彌助が屋敷から持つて参りました絹紬の單合羽、其の長合羽を着て、爪掛の掛りましたところの高足籠甲竹の杖を突き屋敷へと出て参る、提灯に灯を点けまして、勝安寺を出で、此の村を出で、八丁の松原を通り越しますると土橋がある、其處まで掛ります内に吹き込んで來ました夜嵐に提灯の

灯を吹き消されました

彌「エ、旦那様灯を消されました、一寸勝安寺村の農家へ往つて借りて参りませう」

太「ア、御苦勞ぢやな、さうして呉れ」

玲瓏たる處の十五夜の月明で白晝のやうに見えるから、灯は入りさうもなからうが其處が身分のある方、決して無提灯では歩かない、若し咎められた時に一々言譯をするのが面倒だ、提灯と云ふ物は大層徳な物で、なれども月夜に提灯を付けて歩くと、狐に魅まれたやうに思ふ方もあります、身分のある方は月夜でも提灯を点ける、身分のない者は蠟燭を惜んで闇でも提灯は点けません、彌助は勝安寺村へ引返し、吉岡老人土橋の上へ佇んで居る、中空には一點の雲もない名月

太「ア、結構な名月だ、秋の月は又一段と風情がある、我は長門の萩にて此の月を見る、先年勘當をして宮本家へ養子に遣した次男の平馬は、何方にて此の月を見て居るであらう」

と平生は次男の平馬の事などは嘘にも出した事のない太郎左衛門、虫が知らずかフト平馬の事を思ひだして、月を眺めて彌助の戻るのを待て居る途端に吉岡の後より、ツドーンと一發、砲聲高く胸板へ煙硝の煙を立つて打ち抜いた、アツと太郎左衛門タ、とのめを付いて行きながら

太「虫者ッ」

と大刀の柄へ手を掛け七八寸引き抜いて土橋の下り口へ俯伏せに倒れました、流石は武者で、柄へ手を掛けたばかりではない、七八寸引き抜いて倒れて了ひました、深々として夜風の外に答うるものもなく、折柄土橋の下より又

ツクリ現れたのは、賢東齋岸柳、裾高く端折り腕捲りに及び紫龍と稱た短筒、を左手に引下げ、波の平行安の大刀を落しにして小剣を後さまに付け、又ツクリ土橋の上へ上り倒れた吉岡の死骸をツクリと見下して、岸態を見る、能くも姫路の立合ひに吾を小兒の如く扱つた、汝の罪で汝を責める宜い態だ」

死骸に向つて獨言、夜風に連れて大勢の人聲の聞えるに、振り返れば勝安寺の方面、松の間合からチラ／＼燈が見える南無三と其儘竹の越の方面へ一散に走る、處へ勝安寺より大勢の若武士彌助と共に、さぞや先生が御一人で御淋しからん、と急ぎに急いで來たつて見る土橋の上、太郎左衛門俯伏せに倒れて居る、下駄が片々土橋の上にある、片々は向ふの下り口にある。○「ヤア先生御落命、何奴が先生を斯様な處で打つた、各々先生は鐵砲に當つ

たのだ」

流石は亂世の武士吉岡の死骸へ取り付く、煙硝の匂がする。ツレツと一方は新見の吉岡の屋敷へ知らせ、一方は又残つて居る勝安寺の若武士へ告る、俄に鼎の湧が如く、主水は家來の脊に負はれて來たが、泣けど悔めど返らぬ那の世の人、力なく御検視の來るのを待つて、御検視が濟むだから死骸は釣臺で新見へ送り來る、至急主水は手紙を認めて肥後の熊本へ送りました、手紙を出した後、吉岡老人の死骸は勝安寺へ埋葬を致しました、處が吉岡の次男、宮本武藏は加藤の家來となり、此の天正十七年には清正公が肥後の熊本へ國替になつて居ります、播磨の網代から肥後の熊本へ移りました、其の前肥後の熊本は、越中の富山の城主で佐々内藏之助成政、陸奥守と仕官をして、高四十二萬石、越中の富山から肥後の熊本へ國替になつたが、秀吉公の

爲めに滅ぼされて、此の人、氣の毒にも四十二萬石は斷絶をいたしました、其の成政の跡をツツクリ、秘藏の家來であるから清正へ對して下された、加藤が拜領をして、其の後清正自からお繩張りを遊ばして、此の熊本城を築き直したのが、日本に名代の名城で、明治の十年、西南の役には、此の間亡なられた谷干城君が此の城にて御籠城をなすつたといふのは、谷君の指揮も能かつたらうが、一つは此の熊本が名城であつたから、さしもの西郷隆盛も陥落をさせる事が出来なかつたのでげすが、加藤といふ方は、城取り繩張りは今古の名人、尾張の名古屋城も那れは加藤の繩張でございます、天正十三年には清正が肥後の熊本にて御高十八萬石、大層御出世をなすつたものだ、されば宮本武藏は、清正公の大お氣に入つて、お小姓で朝夕御前を勤めて居ります、或日養父武左衛門に向つて

武藏「私は肥後の阿蘇へ參拜をいたしたふ存じますが一寸お暇を願ひます」
 武「結構だ、武藏行つて來なさい」
 之から政名は草履穿きで阿蘇ヶ嶽明神へ參詣をしやうと、僕を連れて出駈けまする、熊本より阿蘇ヶ嶽明神までは十里餘りの道、自宅を立出で武藏政名家來と話しをしながら四五丁來ると武藝者にあるまじき事で石に躓づき武藏は左りの親指を痛めました
 僕「どうなすつたので若旦那」
 武「イヤどうも不覺悟千萬な事で、平地を歩いて居るのに石に躓づいて、少々爪を痛めたやうだ」
 僕「夫りやア大變マア〜お待ちなさい」
 手拭を破つて足の親指を結びました

武「私は今日参詣を止めて歸らう」
僕「左様でがすか」

武「止さうよ神詣での出掛けに怪我をするやうな事では何か我が身に障りがあるのだに依つて、斯様な時に参詣をいたしお叱りを受けてならんから歸らう」

僕「さうでげすかい夫ぢやアア歸るとしませう」

僕を連れて熊本城へ立歸つて参り

武「只今戻りました」

父「どういたした武藏、大層早かつたな、未だお前はもの二三丁行つた位だが……」

武「左様でございます、四五丁参ると不覺悟千萬にも石に躓つて左足の親指

の生爪を剝しました」

父「成程、イヤ夫はな、必らず武藏者だからといつて、平地で躓づかんとは限らん、幾ら覺悟いたして居つても時の災難、是はどうも遁れる事は出来ん大難が小難、マア、さういふ時には止した方が宜からう」

ソコで藥を附けまして武藏政名は指の療治をいたしました、然る處へ長門の國萩より書面到來をいたしました、武藏が披いて見ると這は如何に、實父吉岡太郎左衛門無二齋萩の小路に於て鐵砲に中つて落命いたし、其當の對手は證據はないと雖も播州姫路の龜山に於て立合ひをいたし、物の美事に打負した彼の賢東齋岸柳に相違ない、至急武藏に一度國表へ戻るやうにといふ兄主水からの書面、武藏政名大きに驚ろいて武左衛門に此物語りをいたしますと武左衛門が

父「夫は意外の椿事、元來賢東齋岸柳といふ者武邊社會の憎まれ者、彼の姫路表の立合は武邊社會に於て知らん者はない、了簡の間違つた岸柳であるから、必ずず實父を討つたに相違あるまい、早速長門の萩へ立越へて兄主水に様子を伺ひ實父の敵岸柳を討取つて宜からう」

といふので茲で宮本武左衛門が願書を認めて家老の加藤與左衛門へ附いて差出しますると加藤與左衛門から、彼の願書を宮本へ下げまして、直ぐに押返して願書を出すと、亦下げられました、ソコで宮本親子がどういふもので加藤與左衛門が願書を取り上げて呉れないかと相談の上で與左衛門方へ出向き對面をいたして

武「早速御家老伺ふが、どういふ譯で願書をお取上げにならないのでござりまするか」

と尋ねたときに與左衛門が

與「夫は宮本氏、其許にも似合はんではないか、敵討ちの願書を差上げて御主君よりお暇は出まい、何故かといふに宮本武藏は一度吉岡家を破縁いたして今は宮本家の相續人、然らば當家の家來、貴所の忤されば吉岡の縁は表向き絶れて居る、然るを實父の仇討ちを仕度ひといつて願ひ書を出してもお用ひにはなるまい、武術修業と文面を改ためずんばお暇は出まい」

武「成程、御尤も千萬、我々の氣の注かん所、忤けなし」と立歸つて武左衛門、我が子武藏に其話しをいたしまする

「御尤もなる御家老の御言葉、お情けの程有難し」と是より願書を認直しまして加藤與左衛門に附て願ひまする、加藤與左衛門直ぐに清正公へ彼の願書を差上げる、時に清正公願書を渡さ見ると未だ腕前

不鍛練であるに依つて、武術修業をいたし度ひから兩三年お暇を戴き度ひと

いふ
清「早速宮本親子を呼べ」

とあつて、武左衛門と武藏を御前へお招きに相成りました、兩人平身低頭をして居りますと

清「如何に武左衛門其方の養子武藏腕前未熟であるに依つて、武術修業をいた

そうといふは感服至り、速かに清正暇を遣はすであらう……コレ武藏其

方いまだ弱冠にいたして、腕前未熟であるから、修業をいたさうといふ

は宜き心掛け、早速暇を遣はすであらう、去りながら修業中に金子に差支

へなば、予が指圖いたして置くに依つて池田、福島、淺野、黒田、まつた

加藤左馬の亮、細川、此者どもの屋敷へ参り、宮本なる事を申し入れなば

旅費に差支なきやう取計ふに依つて、左様心得、随分丹誠を凝し修業をい

たし、適ばれ腕前上達いたして立戻れ、是を其方へ遣はすであらう、何國

何地に於て狐狸妖怪に出逢はんものでもない、其方の守りといたせ」

とあつて傍きにお置きになつた山城の國京師の住人、來左衛門國次の二尺三

寸脇差は同じく山城の國京師の住人綾の小路貞利の古今の名刀を下し置かれ

まする、是宮本親子のために有難きお言葉諸國を修業中病煩ひで金子に差支

へし其時には何處へでも願つて出る、旅費等に差支へないやう清正から豊臣

七人の荒大名へ斯ういふ人達へ頼んで置き、我が家來宮本武藏といふ者武術

修業中若し願つて出たら、清正より返金致すゆる一時立替へて置いて貰ひ度

ひとといふ事を依頼する、されば何國何地に居るとも武藏は氣丈夫であります

道中へ出て旅費に差支へるやうでは、迎も敵討ちなどは出來ません、是では

武藏何處へ行つても金に差支へはない、實に本人の身に取れば有難い、殊に
 清正は武術修業といふは名のみにして、其實は寶父吉岡無二齋の仇討ちをす
 るといふ事は御存じ、依つて來國次の名刀を下し置かれましたので君前のお
 暇乞ひを細やかにいたして愈よ出立の時には清正公の家老小代下總、加藤興
 左衛門、木村又造、井上大九郎是等の人々家老達が集まつて二百兩といふ餞
 別を武藏政名に呉れました、直ぐに萩へ來て父の墓前に參詣をいたし、夫よ
 りいよく仇討に出立といふ事になつた、然る處、兄の主水は病身なるを殘
 念に思ひ自殺を遂げました、仕方がないので武藏兄の初七日を濟せて一度播
 州姫路の御城下へ乗込み巴屋といふ宿屋と泊り、巴屋の主人の世話で姫路城
 内烏組の足輕頭牧野惣八に引合せ、肥後の國阿蘇ヶ嶽の神職の三男瀧本又三
 郎と偽名を名乗つて、宮本武藏政名が新參烏組足輕に住込み敵賢東齋岸柳の

立歸るのを待たうといふ心底、足輕頭の牧野惣八が

惣「時に瀧本お前は新參足輕に我々の仲間へ入つたが、入り早々に散財を掛け
 て氣の毒だけれども、三貫ばかり散財をして貰はなければならん事がある
 夫もお前はかりぢやない新參足輕は皆散財をして居るのだから」

武「成程夫はお頭お易い事で何をいたしまするので」
 惣「されば足輕の仲間へ入つたといふ振舞ひをして貰ひ度ひ、皆各々やつて
 來たのだから」

武「結構でございます、三貫で宜いのでござりまするか」
 惣「ア、三貫あれば十分だ」
 武「左様なれば何分願ひまする」

茲で宮本が三貫出して、頭の牧野惣八に渡す、是から蕎麥、酒、或は魚、亦

は蒸菓子などを大層買求めました足輕一同を招いて懇親の振舞、皆集まりて

○「大きに瀧本御馳走でございます」

△「大きに瀧本御馳走様だ」

とツラリと一同並びました

武「御一統様甚だ失禮だが御悠くり召上つて戴き度ひ」

各々喜んで御馳走になる中に一人、壁に憑掛りア、と歎息をいつて居るものがあるから

武「如何でございます貴所召上つて戴き度ひもので、御酒はいけなしたのでございますか」

○「ナニ瀧本、拙者は酒もやれば甘い物も往けるがね、些ツと胸に塞へて居ることがあるので」

武「何です」

○「外ぢやアないが、拙者は今夜姫路のお天守番だ」

武「成程」

○「故ゆえに我れは頂戴が出来ないのだ」

武「其お天守番といふのは名々一度宛延ッて来るのでございませうな」

○「さうとも瀧本今にお前の番になるよ」

武「左様なら斯う致しませう、貴所の今晚お勤めになるのを私しが参りました、私しの番の時に貴所に行つて戴くとして、今晚は御悠くり茲で召上つたら宜しうございませう」

○「成程さうなると拙者の方は充分のやうだが瀧本お前には氣の毒だな、御馳走をしたり他人の當番を勤めてやつたり、拙者は充分過ぎるが尊公に氣の

「毒だ」

武「ナニ些とも氣の毒な事はございませぬ、各々一度宛は廻つて來るので早かれ晩かれ勤めなければならぬ、拙者が行きませう」

○「夫ぢやア瀧本さうしてお呉れ、さう事が極れば充分に拙者御馳走にならうかね」

武「どうか宜しう召上つて下さいまし」

一同が聞いて

一同「氣の毒だね、瀧本散財をさせて入り早々お天守番なんぞを勤めさして」

武「どういたして行つて参ります」

○「未だ早い日が暮れてから行つて宜し」

充分に暮れ渡りますると武藏政名は支度をいたして、兩刀を差し、姫路の天

守へ乗込みました、一番下の所にボンヤリ燈火が點いて居る所へ武藏は座を構へて、夜の明けるまで居りましたが何事もなく夜が明けてから、足輕達へ望に任せて二刀を教へて居りました、或時木下若狭守勝俊侯御前体にて、和漢の英雄豪傑の物語りの出ました時に

「我が居城姫路の天守であるが、臣等にも度々物語る如く、既に太閤姫路本城天守の頂上へ人を禁じて上げ玉はず、何者か姫路城五重の絶頂を見届ける者はあるまいか」

時に御前に居た若武士顔の色が變つて、誰が見届ける者があるものか、木下將監進み出で、

將「只今の仰せ御尤もなれども、臆病未練の若武士、中々天守見届けるなど、は思ひも依りませぬ、烏澁がましくは候得共御當家烏組新参召抱への足輕

瀧本又三郎と申す者に、天守絶頂見届けのお役仰せ付られて然るべし」
勝「左様か然らば其瀧本又三郎と申する者に申し付けるであらう、將監宜きに
取計らへ」

との上意、木下將監喜こんで御自分の小屋へ、瀧本又三郎至急用事あれば、
罷り出でよといふ御沙汰、頭が是を聞いて

頭「ハテナ瀧本何だか知らん、元老から至急用事あるから出るといふ殊に依る
と元老が瀧本お前の三又流を稽古しやうといふのだ屹度夫に違ない」
足輕頭牧野惣八が同道いたして將監殿お小屋へ出ました、木下將監が

將「さて惣八、瀧本又三郎といふのはどの仁であるか」
將監は知つては居るが空嘯いて尋ねると牧野惣八が

惣「エ、恐れながら元老、是に召連れましたるのが瀧本又三郎と申する者でござ

致します」

將「ア、左様か……某がしが將監であるが逢ふのは初めて、時に瀧本又三郎
餘の儀ではないが御當家姫路の天守、未だ五重の絶頂を見届ける者が
に依つて是を其方へ申付ける、天守の頂上を見届けて立戻れ、さすれば、
夫を功に取立つて遣はすから」

牧野惣八ビツクリして

惣「瀧本、止しなよ、断はつて了ひな、どうして天守へ登れば命がない、早速
お断り申上げろ」

瀧本ニヤリと笑つて

武「元老の仰せ有難き仕合せ身不肖ながら瀧本又三郎速かに見届けまするで
ござらう」

將「イヤ夫は重疊、至急頼むぞ」
牧野惣八驚ろいて

惣「何んだい瀧本見届ける、仕様がないなね、危ないよ、行くから」
武「早速支度をして登りませう」

是から足輕部屋へ立歸り、支度を整へて、下へは真綿を疊んで肌襦袢を着用なし、身軽く扮装して、小刀は山城の國の住人綾の小路貞利一尺八寸、大劍は來左衛門國次目釘を取替へ鯉口を寛めて、さて姫路の天守に近付きませう此播州姫路のお天守といふのは天正九年羽柴筑前守秀吉公、中國探題職に相成る時に一城を築き天守を築かんとする時に一つの森がある、其内に社があつたから秀吉お尋ねに相成ると小坂部大明神としてあるが何を祀つてあるのぢやとお尋ね、誰あつて答ふる者なき中に、老人一人進み出でまして恐れなが

らは是に從前加古川の主人足利の執權高野武藏守師直の息女小坂部姫と申すのが師直の小姓采女と申すものと密通あひ、然るに事露顯して采女は當地へ來り敢なく此所に死去いたします、然るを小坂部姫采女の跡を戀慕ひ流れ流れて當地に來り采女の最期の事を承まはり大いに歎き遂に采女の墓前に於て敢なくも最期を遂げました夫を里人氣の毒に思ひまして、采女の塚を發掘て其中に小坂部姫を共に埋葬いたしました是から小坂部大明神と崇め上げますると斯う申し上げたる時に秀吉公

「尤も千萬、身分の高いも低いも區別のなきは戀の道ばかり、いざさらば速かに此所へ天守を築かん」

と、是より彼の森を打碎いて、人夫を掛け足場を組せるに、不思議にも大風吹起り、忽ち人夫を損じ足場を碎く、秀吉公憤然と怒つて再度足場を組せ

「萬物の靈長たる人、何ぞ明神に誑かされんや」とお怒り、然るに其夜秀吉の枕邊に小坂部姫現れ、我が靈魂を祀り呉れよといふ夢を見て、秀吉公遂に姫路の五重の天守を築き上げたる後、天守の頂上に小坂部大明神と祀り奉まつりあつばれ金銀を費やし美事に秀吉公此處に小坂部姫を祀りまする、其後此天守の頂上へ人を禁じて上げません、秀吉公繩張りの城であるから疊の心は總体芋殻で、一番下が千疊敷さ、二重目が八百疊、三重目が六百疊敷さ、四重目が四百疊、五重目が二百疊、此五重の天守が常に白雲櫓を捲くといふ位ゐ、高い天守でございます誰あつて此頂上へ登る者が無い、然るに此度木下將監の頼みを請けて宮本武藏政名只一人剛膽の人だに依つて天守見届けに参り、二重目まで来ると武藏の顔の前を横一文字に突ツ切つて行く者がある、大概な者なれば膽を潰すが剛膽なる武藏だから

身體を透して彼方を見て居たがハ、ア扱は蝙蝠だなど宮本は見切りました、三重目の所へ登つて来ると這は如何に縁と離れて居る中段でバツと燃え上る火の光り、ハ、ア不審や縁を離れて陰火が燃る武藏身体を屈んで下から見ると中途に火が燃えて居りますすぎりで、四邊は森々寂寞眞暗がり、武藏此様子を見て、ハ、ア扱は狐狸の類ひか、成程、太閤人を禁じて當天守へ登らせ給はざれば必らずや狐狸の類ひ其虚に附込み悪業をすると覺えたり、何條何程の事やあるかと宮本は恐れ氣もなく進んで来ると不思議や火は何時しか消失せまする四重目へ掛つて来ると俄に耳朶に響くはごいごいと家鳴りがするからと思へばがーらがらくと石が降つて来る、武藏は膽の落附いた方だから騒もやらず、ハ、ア様々の所爲を仕しなさん陰氣を見せて石を降らせる音の聞ゆるは是ぞ狸の業にあらず、正して狐か山猫の業なりと武藏は勘付きます

る、狸に石を降らせる術はございませぬ、狐五百歳にして白狐となり、宜しく雲を呼んで雨を降らし雷を起して自由自在の業をする山猫五百歳にして迦闍となり、是は雲を呼び雨を降らし雷を起します、其術は迦闍になれば出来ます、猿五百歳にして狒々となり、是は人間を取喰ふの術はあれど、雲を呼んで雷を起すといふ術はございませぬ、武道堅固の宮本政名若年ながら、萬巻の書を読んで居るから是は狐か山猫の業だと見切りを附けました四重目から五重目へ昇つて来る、森々寂寞として物凄く眞暗がりの五重の天守正面に小坂部大明神を安置し奉つる、銀の幣束はギラ／＼光つて居ります、其前に來つて武藏政名いでや變化御參なれと來國次の大劍を左りに引附け、右には小刀綾の小路の鯉口を切つて武藏は体を固め八方へ眼を配り、心を配つて扣へて居ります、モウ何時であらうかと思ふ内にアラ不思議や武藏の前に忽

然と現れ出でたる一人

「如何に男子面を上げよ」

と呼はる聲に宮本武藏屹度打見遣れば十二一重に緋の袴、蓬々眉に薄化粧、頭髮は中すべりといふ下げ髪、申し上げるまでもない、尊とさ御方様のお髪頭は大すべりといふのに取上げます、其他の者には大すべりといふ髪には取上げられません、今是へ現れ出でたるは官女の姿、中すべりといふ頭髮にて「善哉」妾は小坂部明神なり、人恐れて登らざる五重の天守、若年の身を以て見届けんと登り來りしは志あつぱれなり、併し凡体を以て當天守の頂上へ登り妾の面前を穢さんとする其罪輕からずと雖も忠義の志を思ひ今宵は差許し遣はす、以後は決して相成らんぞ、亦今宵天守を見届けんとて登り來りし其剛膽感心なり、依つて是なる劍を其方へ遣はす、ゆめ／＼

疑ふ事勿れ

と箱に入れたる儘劍一振り置かれる宮本政名刀箱を拜領して

武「實に有難き小坂部明神のお告げなり」

と悉とく喜んで夜詰めをして居りました、所が何事となく東が白みまする櫓

の頂上で夜が明けても未だ里は暗うございます、茲で朝日の登るのを見て、

宮本は神前の廻りを見届けて櫓を下つて参りました、さて天守を下つて木下

將監の小屋へ参り

武「昨夜夜詰めを仕つりましたる處、何事もございませぬ、夫に就て小坂部

明神より、斯様な劍を頂戴いたしましたる、早速お届け申し上げる」

木下將監が見ると慥に覺へある刀箱、蓋を拂つて中を見ると太閤殿下より當

木下家へ對しお預けに相成つたる金の象眼にて飛龍丸と銘の這入つて居る郷

の義弘の劍、ハテ不審と木下將監刀箱を請取り

將「追つて沙汰をする」

と瀧本又三郎を足輕部屋へ返し直ぐに登城いたして木下若狹守殿へ

將「昨晩瀧本又三郎に申し付け天守見届けの役をさせましてござる夫に就て

瀧本又三郎儀小坂部明神より斯様くにして劍を拜領いたしてござる、併

し御當家御寶藏に秘めある飛龍丸に寸分違はず、早速寶藏係へ仰せ付られ

お検めあつて然るべし」

是から木下侯から仰せがあつて寶藏係り、寶藏の内を調べると、這は如何に

太閤殿下よりお預りになつた飛龍丸郷の義弘の刀箱ぐるみない、寶藏係の者

大いに驚き、急ぎ此趣きを勝俊侯へ言上に及ぶと若狹守殿憤然としてお怒り

あつて

勝「扱は足輕瀧本又三郎不届きにも我が家の寶飛龍丸を奪ひ取り、隠すべき所がないゆゑ小坂部明神より拜領なしたりと偽りを構へる速かに召捕へて罪科に行なへ」

と悉とくの御立腹、木下將監是を聞いて

將「御尤もなるお怒りでござるが拙者少しく合點の參らん所がある、瀧本又三郎に限つて賊を働く者ではござらん、其れ故奈如とならば、彼は新參召抱への足輕でございます、御寶藏が何處にあるか亦御寶藏の内には御當家の寶、何々の寶があるや知るべき謂れはございませぬ、是には何か仔細のある事と相見へます、暫らく將監へお任せ下し置かれませぬやう」

勝「成程さう申さば將監尤もであるが、今亂國であるに依つて、事に依つたら瀧本又三郎といへる奴、敵國の間者なるやも知れんに依つて油斷いたす

な、兎に角罪科を遁して揚り屋入り申し付けるであらう」

茲で木下將監が小屋へ退つてから瀧本を呼んで

將「實は那れなる劍は御當家の寶物、夫を小坂部明神より拜領いたしたといふ其儀に就て是々、如何にも其方へは氣の毒であるが揚り屋入り申し付けるやうなもの、此將監目の黒い内は決して其方へ不自由なる事はさせんに依つて左様心得る」

武「元老の仰せ如何ばかりか有難く拙者誓つて賊心はござらん」

木下將監が請合つて揚り屋入りになりました所が足輕部屋に居るから見ると却つて樂だ、將監から三度く美味ものを下さるし、運動は附くし、唯戶外へ出でブラ〜歩けないだけで、宮本は樂な身の上、然るに足輕共は一同相談をして

甲「どうだいマア瀧本は酷い目に出逢ったな」
乙「さうさだから瀧本止せは宜いのに詰らない真似をするから其んな目に逢ふのだ」

甲「併し元老が亦瀧本を大層御負担だからな」

丙「さういへば此間瀧本に逢つたよ、大分肉が附いて平氣の平左衛門で足輕部屋に居るより此方が樂だといつて居た」

甲「ナニ同役、樂ぢやなからうよ」

丁「併し御同然に縁あつて足輕部屋へ來たのだから、信心をして瀧本の疑念の晴れるやうにして遣らう」

と其所は皆持つ持れつ朋友の間からだから、牧野惣八始め宮本の疑念が晴れるやうにと斯ういふ心得で瀧本が可愛想だと、寄ると集まると此評判ばかり

然るに家老の木下將監は瀧本を宮本と知つて、彼れに宮本だといふ事を一言いはせ度いと思召し、折に觸れては來て他所ながら尋ねて呉れる、所へ天正十九年二月の中旬岸柳が立歸る、之から姫路城立合ひの一席。

第五席

二月の中旬、岸柳姫路城へ立戻りました

若狭守殿へお届けが濟んで、姫路城へ毎日御機嫌伺ひに出ますると、三年の間修行をして今は天下に我が向ふへ廻るものはないやうに御前で廣言ばかり吐いて居る、木下將監は、如何にも小癩に障つて堪らない、若武士の中にも、岸柳の傲慢を憎む者もあるから

○「如何でござらうナ元老、余り岸柳が傲慢で片腹痛い、彼は強いか知れんが

實に残念、どうにか耻を搔せる工夫はござるまいか
將監は笑つて

將「心配いたすな、岸柳如き奴を打たせるは造作もない、新參召抱への足輕瀧本又三郎な」

○「へエ」

將「那れに申付けて、岸柳を小ッ酷く打やしてやらう」

○「エ、瀧本、彼は未だ若年者で、宜しうございますか」

將「ソ、宜いとも、彼は二刀を宜く使ふから」

○「へエ、元老どうして御存じで」

將「拙者、足輕部屋で大勢を相手にして居るのを見て居たが、余程宜く使ふな」
○「へエ」

將「早速、上へ申し上げやう」

とソコで木下將監から若狭守殿へ

將「岸柳は三年の修行を仕り、日本無雙の腕前になつたと傲慢を申し、實に

片腹痛く心得まする、君には、御最負でござるが天下の人は宏大でござり

まする、丁度幸ひなるは、新參召抱への足輕瀧本又三郎、彼は二刀を能く

使ひますれば、彼と岸柳と手合せをさせ、彼に打勝ちますれば、速かに揚

り屋入り御免仰せ付けられたうございまする」

と申し上げると勝俊公

勝「ハ、ア左様か、然らば瀧本又三郎と岸柳、手合せを申しつけるであらう」

と仰せられたので、木下將監が揚り屋から瀧本又三郎を我が小屋へ招いて

將「さて瀧本長らく御窮窟でござつたらう、今般、賢東齋岸柳立歸つたが、其

の傲慢如何にも片腹痛いによつて、其の方手合せをいたし、岸柳を打負せなば、其の功を以て、將監が執持つであらう」

と云へば、宮本天へも昇る心地して

武「誠に元老には種々御盡力に預り、心魂に徹し瀧本又三郎有り難く心得まする、願はくば、岸柳先生と立合ひ仰せつけられたく」

將「湯浴みをいたして相待つやう」

喜んで瀧本又三郎、足輕部屋へ歸つて、是から湯浴みをいたし、心中には親の敵、兄の仇たる岸柳と立合ひをいたし、彼を一本に打込み生擒つて置いてから、改めて木下侯へ願ひを上げ、尋常に仇討ちをしたいと意氣揚々、是を見て足輕一同は

「オイ瀧本、剛いな、御家老の鑑識に叶ひ、岸柳先生と立合ひの出来るやう

な腕前だもの、丸山先生は敵ふ氣支へはねえマア〜目出たい、確かり瀧本やつて貰はうせ」

足輕共も一同グク〜と喜んでゐる、ソコテ賢東齋岸柳を御前へ呼出して、木下將監が

將「さて岸柳、其の方三年の間修行をいたし、天晴れ腕前上達に及びし由、當家新參召抱への足輕瀧本又三郎と、至急手合せ申しつけるによつて左様心得る」

岸「承知いたしました、就いては、其瀧本又三郎と申す者は何歳にございます」

將「然れば今年十八歳」

岸「十八歳……第一何流を使ひますか」

將「左様、二刀を宜く使ふ」

岸柳心中にギョツとしたのは、年十八歳で宜く二刀を使ふといふのは、吉岡太郎左衛門無二齋の實子吉岡平馬、當時加藤家の養子になりしと承る、年齢骨柄、殊に二刀を使ふといへば、宮本より外にはない、扱は彼奴實父の仇と我れを尾け狙ひ、此の姫路へ下向をなし、當家へ足輕に住込んだに相違ない、是ぞ尋常の奴に非らじ、年は十八歳とはいひながら、藝は名人の段に足を踏掛けて居ると心注いだので、岸柳は

岸「承知いたしましたが、併し手前も風邪でございますから、全快まで四五日日延べを願ひまする」

將「夫は宜し」

と茲で賢東齋日延べを願つて置いて考へたのは、中々尋常の事では危ういによつて、堤大和守寶山が工夫に及んだる寶山流の振杖を、人知れず岸柳稽古

をして、此の振杖で宮本武藏の腦骨を打碎いて呉れんといふ卑怯な奴、いよ振杖が手馴れ熟練をして來た所で、病氣全快のお届けをいたしまする、是によつて、雙方へ御沙汰に相成り姫路御城内庭先へ幕を張り、岸柳は天地人三人の弟子を連れて、床机に掛り控へ居ります茲で武藏は、青山文平、澤田空左衛門、押田佐吉の三人を、苦もなく打込んで了ひました賢東齋岸柳、幕の内から見居たが、いよ宮本に相違ない、尋常の相手でないと思ふから、彼の寶山流の振杖を携さへて、幕を絞つて立出でたが、互の名前を名乗り、岸柳は後へ退つて二三偏棒を振つてゐたが、ギツト星眼に棒をギリ／＼と付けた、宮本武藏は、右劍を眞向に振構へ、左劍を一文字に突出す是武藏が天地陰陽の構へ、鶉の毛で突いた程の隙もない、互にエイツ、オーツと氣合ひを掛けて、詰めつ緩めつ戦つて居た内に、岸柳心中に引ツ外され

ば夫迄、受ければ此方のものだ、と、ヤツといふ聲諸共に星眼の棒を上段より拂込む、心得たりと宮本が、一足踏み込んで天地の劔にガツキリと十字に受止める、受けたが早いか中に仕込んだ鎖付きの分銅、ガラ／＼と出て来た、失策たと宮本が、體を開かうとしたのだが、左の小鬚へ分銅が當る、強く當つたのではないが、掠つても堪らんのは、八角の分銅、講談師の面體なら千枚張りであるから、掠つた位では傷もつきませんが、宮本の面部は皮が薄い、左の小鬚を掠られたからメラ／＼と破血に及び、思はず二足ばかり退る内、岸柳は手許へ棒を引く途端、鎖も分銅も棒の中へ這入つて了ふ、夫が早いから遠くに居る者には分銅が出たか出ないか分りません、武藏は參つたといふ聲が出ない、家老木下將監椽端に進み出でまして

將「コレ瀧本、如何いたした」

武藏怒れる眼に血を注ぎ

武「御家老へ申上げますが、手前參つたといふ聲を掛けませんのは、岸柳先生近頃異な振舞、卑怯なる得物をお使ひに相成ります、只今お使ひに相成つたのは、堤大和守寶山が工夫に及んだる寶山流の振杖でございます、振杖なれば是は斯ういふ物であるぞと、前に得物を断はるのが、明らかかな勝負、然るに無断にて、唯の棒と見せ掛けられ、勝負をいたして計らずも後れを取りましてござる、御指南番に似合はしからざる御卑怯かと存じまする」

木下將監斯くと聞くと、憤然と怒つて

將「宜しく、卑怯な奴だ」

と云ひながら、岸柳の様子を見ると、最早賢東齋は襟を取り鉢巻を取つて、

木下若狭守殿御前に控へて居るから、木下將監が

將「コレ岸柳、其の方は只今瀧本又三郎と立合ひをいたしたに、寶山流の振杖を以て勝負いたしたさうだな、其の方は三界一無敵流といふ流名なら、何故木劔を以て立合はん、卑怯なる得物を以て立合ふとは怪しからん、夫も立合ふ前に、振杖ならば何で断らん無断で立合ふとは卑怯であらう、今一度立合ひ直せ」

聞くと岸柳カラ／＼と笑つて

岸「左様でござる、他流試合に一々敵に得物を断はる事はございませぬ、是は何の得物だと断る暇はござらん、普通の棒か振杖か、夫へ眼の止まらんのは彼が未だ藝道未熟でござる故、己れの藝を顧みず、左様な事を申すは、彼が負け腹を立つといふもの、再度の立合は御免を蒙むる」

斯う云はれて見ると、岸柳の喋舌くる所も満更理のない事もない、木下は腹が立つて堪らんから、再び椽端へ出て參つて

將「サテ瀧本、只今岸柳が斯様々々申したが何れ再度の立合はさせるによつて、残念ではあらうが我慢をいたせ」

大地に手をついて居た瀧本又三郎

武「誠に御家老の重々なるお骨折り、忝なう存する、然らば御免」

と幕の内へ飛込んで、其の根方に置いた大小を取るより早く腰に打込み、再びお庭先へ走り出でたる勢は、四邊に風を捲き天地に轟く大音を揚げ

武「如何に賢東齋岸柳、汝は卑怯にも天正十八年八月十五夜、萩の小路に鐵砲を以つて、我が實父吉岡太郎左衛門無二齋を討取つたであらう、拙者は吉岡無二齋の忤同姓平馬、當時宮本武藏政名なり、實父無二齋の仇敵たる岸

柳、いで尋常に勝負いたせ

と呼はりたり、此の時大勢の者共、宮本なりと聞き知つて

「成る程、道理で強いと思つた、瀧本らしくはないて」

皆呆氣にとられて扣へてゐる、木下若狭守は是を聞くや大きに怒り

勝「ヤヨ無禮なり、足輕瀧本又三郎只今に相成り、吉岡の倅宮本など、高言を

吐く、是ぞ敵國の間者なるべし、召捕れ」

と呼はる、主命なれば止むを得ず、若武士衆が

「ソレ瀧本を召捕れ」

と騒ぎ立てるけれども、眞實召捕らうといふ者はない、又此方の武藏とても

岸柳にこそ恨みがあれ、木下家の若武士には意趣も意恨もある譯でないから

若年だが物に狂ふやうな宮本でないにより、罪なき者を斬つても益なしと、

大剣を引抜きささま峯を返して兩人の者を左右へ打倒し其の儘姫路御城内を引

き退く、後からドヤ々々追つて来るばかり、木下將監眞ッ先に立つて

將「ソレ汝等瀧本又三郎を捉へる……追つてはならんぞ……猶豫いたす

な、捉へて……追つてはならんぞ」

將「何だ」

○「捉へると仰しやるので」

將「左様」

○「でございませすれば、追つてはならんと仰しやらんやう」

將「黙れッ、居ながらにして捉へる」

○「御申戯仰しやつては往けません、先方は足があつて逃げて行きます、坐つ

て居ては捉りません」

將「捉らなければ夫で宜い」

其の中に、武藏は堀を跳り越えて、堀へ飛込んで了つた

○「ソレ瀧本が堀へ飛込んで了つたぞ。下手へ上るだらうから行け」

と大勢騒ぐ中に、木下將監が

將「コレ、瀧本又三郎は堀へ這入つても上手へ上るよ」

○「へエ、此の堀の流れを上手へ上りますか」

將「されば」

○「下手へ上るのが順でございませう」

將「昔は下手へ上つたものだが今は亂世だから上手へ上る」

○「へ、エー成るほど……」

皆、上手へ廻る中に、下手へ上つて武藏は姫路の御城下を去ること三里半、

潮田村といふのへ逃げて参りまして、郷士の潮田又左衛門の家に隠れて居り

ました、夫は後で木下家に分りましたが、此の時には何處へ逃げたか更に分

らん、非常の騒ぎをして居る所へ、大坂表より太閤殿下の使者として、攝津

國兔原郡茨城の城主片桐東市正且元御上使といたして播州姫路へ到着に及び

まする、玄關へ木下家の重役お出迎ひをいたし、片桐を案内いたして奥殿へ

通す、若狭守殿半途まで出迎ひをいたして、片桐正座に直り、扱太閤殿下の

口上を述べましたのは、此の度朝鮮お手入れに就て、木下家へも夫々役が當

りました、口上を述べて了へば、片桐も御自分の身體、若狭守勝俊山海の珍

味を以て、御上使片桐候を饗應しまする、時に片桐侯が

且「扱若狭殿、只今且元當家へ罷り越したる際、非常に雑踏をいたして居られ

たが、何か事があつたのでござるか」
とのお尋ねでござりまする、此の時に家老の木下將監、如何にも小癢に障つて堪らないから

將「御意にござりまする、片桐侯へ申し上げます、新參召抱へ烏組足輕瀧本又三郎を召捕らんといふので只今雜踏をいたしたのでござりまする」

且「ハ、ア、其の瀧本又三郎と申する者、何か悪事でもいたしたのでござるか」
將「イヤ片桐侯の前でござるが、悪事をいたしたのでござるか」
に於て當家指南番佐々木賢東齋岸柳と立合ひをいたさせました所瀧本は卑怯の得物に掛つて臆れを取りました夫がため此の騒動を惹起したのでござりまする」

且「成る程、其の瀧本と申するは何流を使ふのでござるか」

將「流名は何流なるか將監存じませねど、二刀を宜く使ひます」

且「ハ、ア、其の年齢は」

將「十八才にござりまする」

且「人物は」

將「色白にして瘦形、美男でござりまする」

且「成る程御當家御指南番岸柳は、如何なる得物を持つて立合ひましたるか、岸柳の得物を是へ御取寄せ下さい、片桐拜見をいたさう」

將「承知いたしてござりまする」

と將監直ぐに取寄せた寶山流の振杖、片桐が取上げて右の腕で振つて居たが中でピン／＼響いて居る、ヤツと片桐が敷居へ打付けると中からガラ／＼と鎖と分銅が出る、ヤツと引けば、ガラ／＼と這入つて了ふ、若武士初めて氣

が付いて

「オヤ、妙な得物だな」

片桐見てゐたが

且「賢東齋と申する者何れにござる」

將「夫に扣へて居りますのが岸柳で」

片桐は岸柳を熟々と見てゐたが

且「コレ賢東齋、是へ出る、其の方が只今使つたのは、堤大和守寶山が工夫に及んだる寶山流の振杖であるな」

岸「御意にございます」

且「其の方は足輕瀧本又三郎に、是は振杖であるぞと断つて立合つたか」

岸「断りは仕りません、一々敵に得物を断るやうな事では、他流試合は出来

ません、普通の棒か振杖か、見切の付かんのは彼が藝道未熟でございます」
且「何と、一々敵に得物を断る暇がない、彼が心得んのは藝道未熟だと申すのか」

岸「御意にございます」

且「黙れッ岸柳、夫は町道場へ参つて他流を打込んだ時の言葉だ、先方の腕前が勝つて居ると思へばこそ、得物を断らず、此の振杖を持つて敵の面部を打碎くかさては敵の脳骨を碎くか、其の一命を取らうといふ爲めの振杖、既に汝は三界一無敵流といふ流名にて、過ぎし頃攝州大坂に道場を開き、汝は太閤殿下のお憎しみを受けて、大坂を追放になつた身ではないか、然るに仕合せにして、當木下家の指南番と相成り、殊に瀧本といへるは足輕だ、指南番が足輕を相手に勝負いたすのであるから、謂ば其の方が教へる

身ではないか、身分の高い其の方が足輕を相手にいたすのに振杖を断らず無断で勝負をいたしたといふのは、汝は何か瀧本又三郎と申する足輕に、意恨でもあつて打殺さうといふ心得であつたか、夫ゆる左様な卑怯の立合ひをいたしたのであらう、それで指南番の役が勤まるか、見下げ果たる奴だな」

岸柳も木下將監を欺く辯はあれど、片桐を欺くの辯はありませぬ、満座の中で片桐且元侯に立端を失なふ程に耻しめられ、流石の岸柳真赤に相成つて差俯向いてゐる、木下將監は宜い氣味だ、態を見たが宜いと云はんばかり、若武士も岸柳を憎んで居る人々は、宜い心持ちだと思つて居る、幾ら御最負でも木下若狭守殿赤面をいたして
 勝「コレ見苦しい岸柳、目通りならんから立て、立て〜」

さしもの岸柳鼠の舞ふが如く、御前を退つて行く、後で片桐が且「さて若狭殿、手前はまた瀧本又三郎といふ人物は見た事はないが、年齢骨柄といひ、肥後の國熊本之城主加藤清正が家來、宮本武藏政名と申する者に宜く似てゐる様子、是ぞ清正自慢の家來にて、既に過ぎし頃天正十八年八月十五夜、長門萩の小路に於て吉岡無二齋を鐵砲にて撃つたる者は、正しく賢東齋岸柳の外にあるべからずとは、武邊社會に於て、専ら評判をいたしてゐる、かるが故に宮本武藏政名、父の仇を討たんとて、肥後の熊本を發足なし、偽名を名乗つて當地へ乗込んだに相違ござらぬ、豫て義兄清正より、我が家來宮本武藏、武術修行に立出でたれば、若しも病煩ひの節、片桐領分の内へ届け出でなば、厚く世話いたして呉れよと、我等を始め、池田、福島、淺野、黒田其の他の者へも、夫々加藤家より頼みがあるによ

つて、頼みを受けし家々にては我が領地の代官郡奉行へ申し聞かせあは
 是實たく宮本に相違なし、萬一瀧本又三郎、本姓宮本武藏なる事が分り、
 常家に於て左様なる依怙最負をなしたる次第、熊本なる清正の耳に這入ら
 ば、何條清正其のまゝ安穩に置くべきか必ず太閤殿下へ言上をいたし
 清正より御當家へ談判を向けるかも知れん、宜くくお覺悟なされい、兎
 に角、宮本の在所を探して最と町噺に當家の落度を武藏政名に詫びなけれ
 ば相成りませぬまい」
 聞いて木下若狹守蒼くなつて驚き、何うして熊本の清正に談判を向けられて
 堪るものぢやアない、今日日本に蛇の目の兄奇位る強い者はないのに、其の蛇
 の目の親分に懸合れて、伯父太閤に云付けられては、八十三萬石姫路城は取
 上げられて了ふ

若「誠に片桐殿の御厚意千萬忝けなし、早速瀧本の在所を探すでござらう」
 茲で片桐且元は暇乞ひをして是は大坂へ立歸りました、扱片時も猶豫はして
 居られんから、岸柳を召捕り瀧本の在所を探して尋常の勝負をさせなければ
 木下家の外聞になると十五人の輕輩に下知を傳へて、木下將監眞先き立つて
 得物を押取り、岸柳の小屋を臨んで召捕りに向つて來ると、此方は御前體に
 勤めてゐた岸柳の弟子が、師匠のことを悪しかれとは思はんによつて、片桐
 のいふ事を聞いて驚き、御前を密つと脱け出で、賢東齋の小屋へ來つて、片
 桐の語を岸柳に一伍一什、話をしたから岸柳震へ上つて驚き、猶豫はして居
 られんから持てるだけの物を持つて、天地人の弟子を連れ、遂々岸柳は姫路
 城内を逃げ出してしました、其の後へ木下將監、大勢を連れて向つて來た
 が、サア岸柳の行衛が知れん、是から八方へ手を分けて探す、就中瀧本又三

郎を早く探し出さなければならん、木下家の外聞にも關はるによつて、段々手を碎いて尋ねると、やうくの事で知れたのは潮田村の郷士潮田又左衛門の許に足を止めて居るのが分りました、といふのは、潮田村の又左衛門の父又六といふ者が、姫路の様子は何うであらうと武藏の身を氣遣はしく思ふて悴又左衛門に云付け、其の様子を尋ねると、片桐且元の一言で太守は氣明の夢が醒め果て、今は瀧本又三郎事本名宮本武藏の在所を尋ねて居るので、扱てこそ白日晴天の身の上となつたと潮田又左衛門木下將監の小屋へ尋ね來つて、我等方に宮本武藏が忍んでゐると届け出たから漸やくに在所が分りました、ソコで木下將監八十三萬石の御家老だ、亂世の武士は直なものでございませす、乗物を釣らして自身に、家老の身を以て潮田村へ宮本を迎ひに來て呉れました、武藏は如何にも此の將監に氣の毒で叶はん、是より姫路城内へ案

内をいたされました、扱、宮本武藏は木下將監に連れられ若狭守御前へ出た時に、若狭守勝俊侯兩手をお突さになつて勝「さて宮本、其の方父吉岡無二齋の敵岸柳を召捕らんと存じたるに、卑怯にも彼れ行衛しれずと相成つたり、只今詮索中であるが予の不行届きは許して呉れる」と仰しやつて、八十三萬石一城の主人が手を突いて詫びれば夫まで、ございませす、尤も宮本は律儀の人だによつて、事が分れば決して立腹はいたしません武「誠にお手厚きお言葉を頂戴いたし、有難き仕合せ、拙者實は瀧本又三郎と申すは偽はり、宮本武藏に相違ござらん、さりながら岸柳逐電いたせばとて又賢東齋を討てん事もござるまい、夫につけても武藏暴虎馮河の勇を好むに似たれども、拙者御當家へ住込みたる刻、飛龍丸御劍の儀につき、小

坂部明神に欺むかれ、我等身に濡れ衣を着て如何にも残念、願はくば拙者へ姫路の天守見届け役仰せつけられなば、有難き仕合せ」
木下侯お聞あつて

將「イヤ夫は千萬忝けない、然らば望に任せて勤め貰ひ度い」
是から武藏は木下將監の小屋へ引取つて参りました、宮本と分つた以上は、いと叮嚀に世話をいたします、足輕も是を聞いて

○「何うだい丸山先生、尊公などが遠く及ばない譯だ、宮本武藏だもの、逆も敵ひつこはありやアしない」
足輕頭の牧野惣八が

惣「どうも人物が宜いし、俺も瀧本又三郎とは思はなかつたが、頗ぶる先生だな、併し愈々天守見届けの役を自分から望んだといふが、大丈夫だらうけ

れども、誤りがなければ宜いが」

と心配をして参ります、武藏は十分に支度に及んで、日が暮れると是から姫路天守の頂上を見届けやうと、大膽にも再び上がつて参る、前回に辨じて置いた通り、天守の二重目まで登つて来ると、武藏の顔の前を、一文字に突切つて行くものがある、武藏體を屈めて見ると蝙蝠に相違ない、ハ、アさては前の通りだと右剣左剣の鯉口を寛めて尙も三重目へ進んで来ると、中途に陰火が燃えてゐる、膽力の落付いた宮本、身體を屈めて下から見ると火の縁がない、いよ／＼狐狸に相違なしと恐れ氣もなく登つて来ると、火は消えて了ふ、四重目へ掛つて来ると、ゴ／＼ゴツといふ音がして、ガラ／＼がツと石が降つて来る

武「相變らず風を起し石を降らせる、何の物かは」

と頂上へ進んで来ると、雲に聳ゆる姫路名代の天守五重の頂上には、正面に小坂部明神を祀り、其の前に來つて武藏は大劍を左に引つけ、小劍の鯉口を緩めて、いざ來い來れと待つて居る、スルと次第に更行く夜嵐は、狭間に當つて物凄く、森々寂寞たる中に忽然として武藏の前に現はれたるは十二重に緋の袴、蓬々眉の厚化粧、十二骨の檜扇を携さへ

「善哉、妾は小坂部なり、如何に宮本、人恐れて登らざる禁制の天守へ其の方一人、妖怪を見届けんとして登り來る志過分、併し今宵は許す、再び登らば其の方の命はないぞ」

とハツタと睨んだ顔色は物凄く、宮本武藏物をも云はず、身體を屈め大劍の柄に手が掛かるとエイツと抜く手も見せず斬つけければ、パツと姿は消えて了ふ、其の夜はそれで濟んで翌日となり、櫓を下りて木下將監にも話をいたし

晝間十分に睡眠で夜になつて亦登る、相變らず小坂部明神が出る、斬つけると姿は消えて了ふ、斯くすること三度、如何にも武藏殘念であるによつて歎き手水に及び一心に、摩利支尊天へ信仰をいたし、妖怪の本體見届けさせ給へと祈念を凝して居ります所へ、宮本夜分睡らないのに祈念を凝したる故ついで疲れが出てウツラ〜として居ると

「起きよ、宮藏………起よ武藏」

と呼はるに、宮本兩眼を開けば這は如何に、我が見る前に摩利支尊天、猪の鞍笠に跨がり出現ましまし給へば、宮本大いに驚き

武「アラ忝けなや、有難や大願成就いたしたるか」

と喜ぶに

「如何に武藏、姫路天守の怪物は、汝の力にて討ち難し、當姫路城内より巽

に當つて三里、法華ヶ嶽といふ山あり、是に藥王樹といふ名木あれば、夫を以つて速かに變化を退治いたせ、姫路天守の變化は三百歳を経たる黒狐といへる怪物なり、ゆめ〜疑ふことなかれ」

とアリ〜とのお告げに宮本政名

武「忝なし」

といふ自分の聲に目が醒めれば、全身にビツシヨリ汗を流してゐる、是南柯の一夢、神夢でございます、神夢佛夢、或は虚夢正夢、夢にもいろ〜あるが是は神夢です、宮本は身體を清め、翌日になると、此の姫路の城下を離れて法華ヶ嶽といふのへ登つて、此の山の頂だきにお堂が一ツ、薬師、彌勒如来を祀たもので、ハテ何所に藥王樹といふ木があるかと、窺がつて居ると、木玉に響く斧の音、足早に段々と來ると、梢に上つた一人の親父、銀の針金

を植たやうな髯、頭髮は同じく眞白、身體は澁紙のやう、麻の葉の越中禪を締め、手斧で木を下して居る

武「老人、少々物を聞きたい」

下を見て爺か

老「何か、小侍……………」

宮本先生無禮な爺だ、小侍とは何んだと思召したが

武「當山に藥王樹といふ木があるか」

老「何を……………藥王樹……………ハ、ア、小侍は何か退治やうといふ氣だな、止せ

〜、生兵法は大怪我の原といつてな、可憐命を失なつても詰らん、第一武士には受取り憎い身體だ、色が白くつて柔弱さうだな」

繩梯子から下りて來た爺か

老「何か小侍、劍術は何流を使ふのだ」

武「何流といつて定めはないが………」

老「夫ア往けない、五目といふのは一番往けないよ、那方を三日、此方を二日、駄目だぞ、名前は何といふのだ」

武「名乗るほどではございません」

老「さうだらうな、どうで碌なものぢやあるまい………」

失敬な爺だ、と思つて宮本が

武「拙者は武藤の家來、宮本武藏といふのだ」

老「お前かい、宮本武藏といふのは、吉岡無二齋のお子だな」

老「左様でございます」

老「さうか、イヤ夫は失禮をした、お前の實父吉岡無二齋は天下の名人、足

利十三代義輝公の御前で、十八人の武藝者を、十六人まで負かしたが、其の中に二人だ、勝負なしは、塚原卜傳と此の爺、此の爺もまだ若盛だつた

私は竹光柳風軒といふものだ」

武藏が聞いて驚ろいた、父が存生の中に、常々自慢をしたのは、塚原と此の柳風軒、跡へ退つて宮本が

武「之はどうも、竹光先生、御無禮をいたしました」

老「くやく、其の御會釋では恐れ入る、拙者こそ御無禮を申した、此の柳風

も諸國修行をして剛い眼病で困難をして、當薬師の御利益で癒つたから、

モウ世の中へ出やうといふ拙者ではないから、此の山で薬師様のお堂守を

して餘命を送つて居る、マア、此方へ來なさい」

先に立つて自分の小屋へ案内をして

老「穢苦しいが上んなさい、何か武藏殿退治するのか」

武「されば、三百年を経たる黒狐といふもので」

老「其奴は大變だ、失禮だが、尊公に少し荷が勝ちすぎる、狐三百歳にして黒

狐となり、五百歳にして白狐となる、是容易ぢやない、どんな鹽梅だ」

武「毎晩上つて斯様く、幾ら切付ても雲を切やうなもので……」

老「成程、夫は往けない此の爺などは度々さういふ者に出會つて居る、そんな

通力を得た奴は、尊公の前へ姿を現はして居ても、尊公の後ろに本體を置

くんだから、後ろの方を切らなければ往かん、ウム待つしやい、見て来て

やらう」

柳風軒が木小屋へ来て、暫らく經つ

老「サア宮本氏、折つたよ此の木なら確かだから、尊公の腕前、此の薬王樹で

一ツ打てば退治られる」

武「之アどうも有難う」

老「ソコで跡へ能く氣を付けなければ往かん」

武「承知いたしました」

教はつて喜んで宮本は薬王樹を下げて姫路城へ戻りました、時天正十九年

三月中旬、宮本は姫路城の天守へ又上りました。

第六席

拜殿を左に武藏は體を斜に座りまして、薬王樹を後に置いて、イザヤ來れと
身構へて居ります、當今の午前二時、八ツの鐘は何れの寺で撞き出すか物凄
く聞える、所へ小坂部明神忽然として武藏の前に現はれ如何に武藏、己れは

如何なれば妾を輕んじ當天守へ登り、我が面前を穢さんとするか、愈よ其方志を改め思ひ止まらん。に於ては一命はないぞと眼を怒らしハツタと呪むにびくともなさず薬王樹へ双手を掛け身體を屈んで竹光柳風軒にいはれて居るから、小坂部姫の姿を見ず、居ながらに左りの膝頭を疊へ突いて、踵を立て爪先を突いて右足の膝を上げ、是も爪先を突いて、ザイといへば直ぐに立てるやうに體を拵へ、身體を斜に宮本が後を密と見ると武藏の身體三間ばかり離れて、眞ッ暗の中に猫のやうな形をして眞ッ黒な輪になつて居る物が見へるから、扱てこそ竹光先生のいふ通り正面に形を置き本體を後に置く、今宵こそ變化通しはせじと心の内に臨兵闘者、皆陳列在前と九字をさりながら

武「エイッ」

といふ矢聲と共に宮本が一足飛退き、後へ身體を開きながら、該の薬王樹を双上段から飛退く途端に微塵になれと捲下す、何かは以て堪るべきや、薬王樹を以て宮本に健たかに打たれたから、ギヤツといふ聲物凄く今や姫路の天守は崩れるかと思ふばかり、ガラ／＼ガラ／＼、震動いたし、狭間口を破つてドーンと風を起して飛去つて行く物がある、ホット息を吐いて武藏が四邊へ眼を配れば森々寂寞として其跡に物音なし、心を落附け宮本が薬王樹を振つて居ると其後は何にもございませぬ、左右する内に東が白んで來た、雲に聳へる五重の天守里は未だ暗うございませぬ、武藏が瞳を据て見ると廻りに銀の針を溢したやうギラ／＼光つて居る、近寄つて左りの手に取上げて見るとバリ／＼して其強張つて居る毛である。と見て居る内に太陽が登り十分に夜が明けてから見ると疊の上にボタ／＼血が垂れて居る、打破つた狭間口へ血が

引いて居るから宮本が狭間口から見渡せば流石名代の姫路の天守、野も山も真平に見へます、先づ宜しと薬王樹を提げて武藏は櫓を下つて参る、扱て木下將監の小屋へ来て

武「エ、元老へ申し上げる昨夜怪物の本體を見届けましてござる」

將「夫はどうも宮本氏御苦勞如何なすつた」

武「是々斯様く、慥に打据へたるから垂て居る血汐を便りに参れば見届ける事が出来る」

といふので武藏が大将になり長柄鎗組が十人弓が十張、鐵砲は十挺、熊手鍵細階子等を持たせて宮本は足輕五十人を借受け姫路城内を立出でると是から血汐のボタ／＼垂れて居るのを知るべに段々と進み難所へ掛つて來ると金熊手、鍵繩、細階子を架けて登り、谷を超へ、山を超へ

○「どうも宮本氏の前だが、恐ろしい難所でござるな」

武「左様、貴所はお強いが我々は意氣地がなくて戦國の武士とはいへん」

段々山奥深く進んで來ると先づ姫路城中から四五里も來たかと思ふと森々寂寞たる森がある

○「どうだい同役、物凄いな森だね」

彼の森に近附きて來ると森の中で唸く聲が聞へる、宮本此聲を聞き附け

武「占めた、サア各々逃してはならん、弓組は空に向つて飛上る處を切つ放つて、鎗組は此の森を取巻き出る所を突け」

鎗を下段に取らして、森をグル／＼と取巻き弓に矢を番へて空へ飛上らうといふのを射殺す覺悟、鎗組でも弓組でも戰場を往來して居るから長柄を使ふ事が上手で鐵砲組は膝臺へ取ると一度に森の中へド／＼と撃込む、煙硝

の煙は朦朧として立ち上る、中に宮本が様子を見ると唸り聲が聞なくなつた
武「サア宜し乗込め」

といふのでドツド関の聲を揚げて五十人の足輕、森の中へ踏込んで見ると、
森の真中に穴がある、其穴の中に鐵砲に當つたと見へて仰向けさまに倒れて
居るのを見ると昨夜宮本が見た時には猫程の大きさであつたのが、今見ると
小牛よりも身體が大きからうといふ中々人間一人や二人では自由にならん程
の大物、眞黒な狐、素敵に大きな奴が彈丸に當つて口を開いて死んで居る、
足輕共は見ると驚ろいて震へ出した、宮本首ッ玉へ手を掛け引繰返して見る
と昨夜薬王樹で強かに脊骨を打つたから骨が折れて居る

武「各々是を御覽なさい、拙者が昨夜此薬王樹で強かに双上段から打つたので
薬王樹といふ名木の徳で此黒狐の土性骨を打折つて了つた、夫で彼奴悶へ

て居たのだ」

「成程、どうも恐ろしいな」

武「是を擔いて姫路の城中へ運び、大守へ御覽に入れて跡で火を點けて焼了
はう、兎に角斯様な森があると亦もや妖怪變化が住うから」

と火道具を取り出して忽ちの間に森へ火を點けた、ドードツと一度に燃上
がり、森を形無しに焼捨て了ひます、さて姫路へ立戻るに就て長柄を五六
本合せ黒狐の四足を縛つて是へ通し代るく擔いで今度は平地を選つて出で
参ります、遂々其の日の夕景に姫路城内へ参り届けて置いて翌日御庭前へ彼
の黒狐を擔き出しました、木下若狭守殿お立出でに相成り、黒狐を御覽にな
ると唯膽を潰すばかり

勝「人禁制の五重の天守故に斯様な奴が業をいたしたに相違ない、諸人に見せ

付けよ

といふので、是から大手へ彼の狐を出して姫路城下は勿論近郷近在の者に見せる、見る者は唯驚ろくばかり續いて宮本の名前は天下に轟き渡り、人々恐れる天守へ登り狐を退治たといふので評判が高くなる、然るに竹光柳風軒は法華ヶ嶽から下つて来て、武藏が退治た黒狐を見て、實に美事なる物を退治たり、是程の者でないと思つた、併し斯様な物を此儘拾置いて念が残り祟りをするやうでは宜しくないといふので、是れから竹光柳風軒が御城内の足輕を借り、右の黒狐を法華ヶ嶽へ引取つて其周圍に焚木を積んで油を注ぎ火を點けてドン／＼焼いて了ひ、其の灰は法華ヶ嶽へ埋めて了ひました、是れを姫路の在法華ヶ嶽黒狐塚といふ宮本武藏が退治をいたしたのであります、さて武藏は是れより中國を差して乗り込み、備前御野郡岡山へ來たりました、

此頃岡山は浮田中納言秀家公の御領地であります、丁度宮本の來た時には浮田公御不在でございます、太閤殿下より朝鮮追討の總大將を命せられお在でない、流石は岡山御高二百八十萬石浮田公の御城下だに依つて中々盛んでございます、岡山の城下へ來て彼方此方と見ながら來ると立派な稽古場がある

武「ハ、ア町道場があるな」

と笠の内から看板を見ると白倉流指南白倉源五右衛門鐵心としてある

武「お頼み申す、もの申す」

若「ドレ……………」

武「エ、手前は肥後の國阿蘇ヶ嶽神職の三男瀧本又三郎と申する者御高名を慕つてお尋ね申してござる、一本御教導を願ひ度く推參いたしてござる、

どうか先生へ宜しう」

若「暫らくお控へなすつて……先生」

源「何だ」

若「二十歳前後の男ですが先生に一本御教導に預かりたいと申します、肥後の國阿蘇ヶ嶽神職の三男瀧本又三郎といつて参りました」

源「ハア若年とは感心だな、一本御教導に預かりたいとは剛い言葉だ、大體はお手合せを願ひ度いとか、試合をしたひとかいつて来るマア、此方へ通せ」
弟子が玄關へ出て参りました

若「然らばお通り下さるやう」

武「御免……」

と草鞋を解き足袋を脱いで、足を拭いて昇りました、道場へ案内をされると

立派な稽古場で程なく白倉源五右衛門授袂をいたします

源「エ、瀧本氏には、どうか弟子兩三名お稽古を願ひ度い」

武「恐れ入りますお稽古をいたすといふ程の手前藝才はございません、御教導を請けませう」

と飽まで卑下した一言

源「サア各々他流も藝の薬であるから瀧本氏と手合せを願ひなさい」

並んで居た十人ばかりの弟子が年は若い色は白く弱さうな宮本だから

甲「何だ斯ん奴、拙者が一番先さへ引ッ叩いてやらう、何の高の知れた若年者懼れる事はない」

立出でた一人

團「エ、拙者は白倉源五右衛門の門弟大川團八郎と申する者、お手和らかに」

宮本按換をして、淺黄の風呂敷から木剣を二本出し

武「お相手に相成ります」

團「ナニ、宮本氏には二本お使ひなさるか」

武「左様でございます」

團「成程……」

イヤ慾張つた奴だな一本の竹刀木刀でさへ自由にならんに二本使ふか、並んで居た弟子が

乙「オイ、修業者の瀧本といふのは二本使ふせ、迎も二本の木刀が自由に使へるものか」

丙「ナニとそれは神主の悴だといふだらう」

乙「何故」

丙「何故といつて、ソレ右の手に御幣を持つて左りの手に鈴を振つた癖が脱けないから、ソコデ両方で思ふやうに使ふといふのだ」

乙「ウー、成程」

丙「鈴振り剣術、御幣振り剣術といふものだ、どうか團八旨くやつて呉れ」

と見て居ると、團八郎ヤツといつて構へる、武藏は相變はらず双足に立つて双剣を左右に下げて居る

乙「オイ、何といふ構へだい、頂上から爪先さまで明透しといふのだ」

團八は星眼に附けて居たが

團「妙な剣術だな鈴振り剣術か……」

ヤツと打込んで来るのを瀧本は請けもしないで一足後へ退たから、團八の木剣はッーンと瀧本の鼻ッ先を掠つて空を流れる、失策たと二の返しに打込ん

で来るのを十字でがツキと受け止めて了ふ、受けたかと思ふと右劍で拂ッて左劍で大川團八の肩口をコッンと打つた

團「參つた……」

團八驚ろいて

團「何といふ劍術だい」

乙「どうした大川」

團「やつて見な、妙な劍術だ、三又で受けやアがつた、旨い事を工夫して来たな」

小「ドレ、乃公が出やう……エー宮本氏、拙者は白倉の門弟吉田小十郎と申する者」

ヤツと身構へると、武藏は相變はらず兩方へ木刀をさげて居る、ヤツと打込

んで行く、一足退る、鼻の先を木刀で風を切る、是が後へ飛退かれたなら宜いが、身體を透したばかりで鼻の先きを木劍で掠るから心持ちが悪い

「己れッ……」

と小十郎踏込んで真向から打下して来ると、十字でガツキと受けたと思ふと左劍で拂つて右劍で肩をコッンと打たれる

小「是は驚ろいた、妙な劍術だ」

サア出る者も出る者も皆對手になりません、白倉源五右衛門見て居たが

源「イヤ是は中々大したお腕前、源五右衛門お對手にならう」

羽織を脱ぎ捨て源五右衛門支度をして夫へ立出でる

源「お手和らかに」

と挨拶をしてヤツと位取りをすると、源五右衛門が出て矢張り同じやうに

両方へ木刀を提げて居る

乙「オイ、同役、先生でも那の通りだ」

丙「成程」

丁「那れは私が考へたが神主の子息で時々二十五座の馬鹿踊りをするだらう、

其の時の鐘馗様が馬鹿を相手に舞を舞ふ形だ、二十五座の舞劍術だ」

甲「イヤ手数掛の掛る劍術だな、鈴振り術劍、御幣振り劍術、二十五座劍術が大

變だな併し先生なら唯一討ちであらう」

と見て居る、エイツと打込んで来る源五右衛門、武藏が十字でガツキと受け

た其早い事、失策たと源五右衛門押破らうと押し見ると、シンワリ受けて

退る、引うとすれば手許へツル、と附込んで来る弟子達は見て居たが

「成程、先生も困つて居る……」

流石白倉源五右衛門二三度やつたが、向ふが見へるから木劍をがらりと投げ

跡へ退つて

源「参つたイヤ中々手前などの及ぶ處でない恐れ入つた御腕前」

木劍を引いて宮本が

武「是は先生恐れ入りました、手前などは及ぶ所でないが、手前が請けて居る

内に先生が木劍をお引きになつたので」

源「イヤどういたして、マア瀧本先生、其所は端近どうか此方へ」

是から叮嚀に瀧本又三郎を自分の家で世話をいたして

源「旅籠を取つても詰るまい」

と無理に源五右衛門が止めます

源「實は今まで二刀と戦かつたが斯る藝才のある事は心得んで居つた、恐れ入

ツた

といふので源五右衛門町噺に世話をして呉れまする、宮本も中々源五右衛門は剛い先生だと自分が正直だから人も正直だと思ひ厄介になつて居ります、白倉源五右衛門が二刀を教へて呉れといふから武藏は二刀を教へて居る、迂潤として三月ばかり厄介になつて居たがさて或時の事、弟子の居りません處で源五右衛門が一口飲みながら

源「時に瀧本先生、どうも拙者過日から先生の様子をお見受け申すのに、瀧本又三郎といふのはお偽りでござらう、其實宮本先生でござらうな、如何で今日日本廣しと雖も二刀を使ふ者は先生の外にない、宮本武藏先生でござらう」

といはれると武藏は、此の人は正直だ剛い人だと思ふから我が本姓を明して

も差支へあるまいと考へたから

武「如何にも拙者宮本でござる、武術修業中は瀧本又三郎で歩きます」

源「イヤ夫はく」

武「併し餘人にはどうか我れ等の實名をお明し御無用」

源「決して拙者餘人には左様な事は申さん」

其の場は濟んだが、源五右衛門腕を組んで考へたのは是が宮本といふと些と面倒だ、何故かといふに其白倉源五右衛門の先生は賢東齋岸柳、で師匠の岸柳に勘當され白倉流といふ流名に改め、亦た賢弟澤田空左衛門は岸柳の弟子だ、シテ見ると夫宮本は親の敵と賢東齋を尋ねて居るから明日にも師匠岸柳に出逢へば、宮本が勝負をする、時に弟澤田空左衛門は側に附いて居るから助太刀をする、到底弟の澤田空左衛門などが及ぶ所でない、然らば武藏に

討たれて了ふ、弟の身の上も大切、是は不義のやうだが師匠のため、弟のため、宮本を生かしては置けないと悪心が出た、此備前の岡山といふ所は戸棚風呂といふのが、大層名物でございます、其の戸棚風呂といふのをば源五右衛門が新に造らへ、之へ宮本を入れて殺さうといふ宮本熱湯風呂の大難といふのでございます。

第七席

宮本も當道場には、全たく岸柳が匿まつてないといふ、見定めが付たに依り源五右衛門に暇乞をして立たふといふ心算
 武「イヤさて先生、長らくお世話になつて有難い仕合せ、拙者も之より武藝の修行をいたす、先々をば見物をいたさうといふ、何れ又お尋ね申すでござ

らう」

源「夫はどうもお名残惜い事だ、併し貴郎に何も之といふ御馳走がない、名物の戸棚風呂を出来ました、どうか風呂開きにお這入を願ひたいものだ」
 武「夫は誠に有難い事で」

ソコで岡山名物の戸棚風呂、風呂場へ案内をいたします、檜で新に造らへ上げました、イヤ誠に能く出来て居る、衣類大小を置きまして、其の頃はひは風呂へ入るには、贖鼻禪を締めて入りました、徳川の御代になつても洗湯へ入りますには贖鼻禪といふものを締めて入つた、無い方には風呂屋で貸して呉れましたもので、嬉遊笑覽と云ふ本に、風呂へ入る時に巻いて入つたので湯巻といふのだといふ事が出て居りますが、只今のやうに手拭をぶら下げて扱身で入るなどといふ事はなかつたもので、戸棚の戸を開けて入りました、

○「お温ければ燃します、熱ければ水を入れます」
 と白倉の弟子が戸を締める、嚴重に門を宛て了つた、之からドン／＼熱湯を
 注ぎ込ます、段々湯が熱くなるので、拳を上げて、ドン／＼戸を叩きまして
 武「餘り熱ふござる、願はくば少々水をお差し下さい」

○「委細承知いたした」
 と弟子は代る／＼に熱湯を注しますから、何かは堪るがさや、御自分の頭の上
 まで湯を浴びるやうになつた、さしもの武藏、戸棚風呂の戸に手を掛けて
 開けやうとしたが、開かれこそ、さては白倉源五右衛門、我を計つて入れ
 たのだなと氣が付いたに依つて、ソコで宮本が勝安寺に居りまする頃に、お
 師匠の泰山から學びました、眞言秘密の法といふのを行なふ、之は其の湯を
 水に返すといふほどの術ではないが、何所かに忍ぶ術があるものと見えます

ドン／＼湯を差し込んで居た弟子が

○「先生、幾ら宮本でもモウゆだりましたらう」

源「されば、モウ煎つたらう」

宮本を蝟と間違へて居る

源「一ツ中を檢ためて見やう」

ソツと門を外して、戸棚の戸をば少し開けて、斯う中の様子を見やうといふ
 ので戸を開けると、ドン／＼湯が溢れて居る

○「熱い／＼」

己れ等の足の方へ熱い湯が掛つて来るから、弟子共は片足づゝ持上げて中を
 見やうといふ、武藏は秘密の法を行なつて居るが冷やかなる風の入るのに、
 心我に返つて、眼を開くと、此の始末だ、天の與へと突然其の戸の中からヒ

コリと跳り出し

武「卑怯なり源五右衛門、覺悟いたせ」

と飛出した、全身紅の如く、元結は切れて亂髪、弟子共一同驚ろいた、スハ

ヤ宮本が化けて出たと聾めく中に

源「ソレ各々討取れ」

と源五右衛門の下知、各自に一本づゝ差して居る連中、ソレ討止めるといふ

間に、戸棚の門をぬいて、其所へ置いた、さのみ太い門ではないが、其奴へ

宮本眼が付いたから、門を取上げまするや否、右と左りに五六人の弟子を打

倒す、白倉源五右衛門、大刀を引抜き、切つて掛る、左りへ體を捻りながら

エイツと一聲叫んで横に拂ふと腰の邊りを健かに打たれ、ヨロ／＼とよろめ

く中、ツルリ這つて源五右衛門水槽のこばへ後へに倒れる處を、武藏取直し

た門で、眞向より打たるから、白倉源五右衛門の腦は碎けて其所へ落命、弟

子も二三人其所へ打倒されて目を眩す、ホツと息を吐いた武藏、水槽の中へ

顔を突ツ込み、水を呑み、猶豫をして居る所ではないと、自分の大小はと見

ると、向ふの刀架に掛つて居る、有難しと其の大小を小脇に搔込んで、無我

夢中で白倉の道場を駈出したが、此時は日は充分に暮れて居ります、どんな

人でも、轉倒をしないと限らない、座ながらにして宮本が近所の人を頼ん

で、浮田家へ届けをすればそんな事もないのだが、幾ら伶俐な宮本でも、熱

湯風呂の難に出逢ひ、轉倒するのは尤もだ、遂々岡山の城を素裸体跣足で

大小を搔込んで逃げ出した。岡山の城下外れの白鳥山といふのへ武藏逃げ上

りました、茲に白鳥明神の拜殿がある、其の堂中へ入つてホツと息を吐いた

が、如何にも身体夜風に當つて、ヒリ／＼してどうも堪らない、身体がはて

るに從がつてヒリ付きます、勿体ないが白鳥明神の緞帳を以つて身体へ纏ひ明日の朝になつて浮田家へ届けやうといふので、之へ来て武藏が氣が付いた所へ頻りに地響がして、人足が聞えますから、何れ源五右衛門の弟子共が、我を追つて來たのではあるまいかと、透して見ると、

○「宜しく、サア宜い所だ、怪我をさせるな、大切の代物だ」

△「宜し來た」

縁の上へ一人の女を、猿轡を食ませ、晒布で縛つた奴を轉がして置く

○「マア此所へ擔ぎ上げりやヤ此方の者だ、之で頭へ渡して了へば、二人で五十兩の褒美が貰へる、有難い」

縁の端へ腰を掛けた兩人が、頻りに骨が折れたと話して居るのを、堂中から透して見て居た武藏が、さては賊だな、何れの娘か知らんが勾引されて

來た、不埒な奴だと思ひ、木連格子へ手を掛け開く、ギーツといふ音に、泥棒二人が、オヤ扉が開いたと振返ると、真赤な顔をして明神の緞帳を纏つて出た

武「ヤウ、汝等は、人の大切の娘を勾引して參る不埒者、許さんぞ」
兩人が

△「オヤ此の野郎、明神様が出現をしたのかと驚ろいたら、汝は緞帳を纏つて居るんだな、面の赤いのは、蘇木でもなすりやアがつたんだらう、ソレシツカリして、此の野郎をやつちまへ」

と長刀の柄に手を掛ける、エイツと一聲叫ぶと、常身を食つて堪るべきか、二人共其所へ目を眩す、武藏緞帳をぬいで、其の賊を真裸體にして、之を御自分の身に付けました、賊の締め居た鳴海絞りの三尺のあるのを御自分が

締めて、大小を打込み、一人の鳴海絞の三尺で、二人を後手に縛つて了ひ、女の晒布を解き、猿轡を取つて

武「さて女、驚ろく事はない、俺は加藤の家來の宮本武藏といふ武者だ、災難に出逢て斯ういふ支度をして居る、お前を助けてやる、何所の者だ」

女「有難ふ存じます、私はお城下に呉服渡世をして居ります、俵屋善兵衛の娘とよと申しまするもの」

武「ア、左様か、よし、私が送つてやるから」
賊兩人を一人々に活を入れ、氣が付いて二人は四邊を見ると、後手に縛られて居る

「コリや、ヤイ汝等は此の娘を如何して攫つて來た」

〇「へエ、是や私共が慾で攫つたんぢやございませぬ、私共の頭か此の娘の爲めに戀煩ひをするやうな事で、手前達が攫つて來たら五十兩の褒美をやるからと斯う頼まれたので、ソコで今夜、小僧を連れて地蔵様の縁日へ出て來た所を、搔擾つたんで、私共の了簡から出て攫つたんぢやございませぬ」
武「さうか、併し汝等志ざしを入れ替へて、眞人間になるといふなら許してやるが、さもなければ兩人を今切つて了ふがどうだ」

〇「どうか且那恐れ入りましたが、私共はモウ盗人を性に合はねえんで、止めやう／＼と思つて居るが、國へ歸る路銀がねえから、仕方がないので此んな仲間に入つて居るんで」

武「汝等は當國の者か」

△「へエ、どういたしまして、私は土佐の高知の箔屋職人で、隼の長吉と云ふ」

んで、博奕が好き、酒が好きで、ソコで財産も何もすつて了ひ、遂々國を
 飛出して、流れくして諸方歩いて居る中に、此の岡山へ来て、盗人に捕ま
 つて、行く所がねえから、盗捧の仲間へ入へたんで、私は酒と博奕は好き
 だが泥捧は好きぢやございませぬ………」

武「ウム、此方に居るのは」

△「之は私と一番仲の宜い七之助といふので、之は豊前小倉の者で、根が紙屋
 職人で、七之助は此の岡山の城下へ入る道で、私の所の頭に打捕まつて、
 路銀も着物も取られて、行くところがないからどうか、當分置いてお呉ん
 なさいといふんで、頭の子分になつて、誠に人の宜い男で、實に氣の毒な
 んで二人ながら全たく泥捧はしたくないので………オイ七之助、モウ之を

幸はひに、頭の手を放れたら、此の山を逃げやうぢやねえか」

七「さうとも、頭の側に居ちやア逃げられねえ、逃げるといへば、自分の
 悪事が露顯をするから、殺すと云ふだろうが、此の儘逃げ了へば宜い、
 路銀はなくとも、渡る世間に鬼はねえ、之から一生懸命眞人間になれば、
 三度の物は二度つゝ食つても國へ歸れるだらう、夫ぢやアどうか且那助け
 て下さら」

武「さうか、宜しく、其の志ざしなら助けてやる」

長「夫は宜いが、忌にヒヤ／＼すると思つたら、二人ながら裸體で且那どうし
 たんでございませう」

武「俺は仔細あつて、熱湯の大難に出逢て、身體がほてつて、風に當つても身
 體がヒリ付いて往かん、汝等を一時殺しにして、汝等の着類を今剝で拙者

が着たんだ」

△「へエー、貴所が暖かくなつて私共が冷たくなつたんで」

武「夫は宜いが、此の婦人を代るべく脊負て城下まで行け」

△「へエ旦那、助けて下さるなら茲で逃して下さいまし、城下へ行つて、又貴所が役人に引渡すと命がなくなりますから」

武「いやそんな事にしない、志ざしを改ためるなら助けてやるから、役人が汝等を連れて行かふとしても、身共がやらない」

長「さうでございますか、七や、ぢやアさうしやう、此んな宜い旦那に出逢つて助けて頂だくんだ、フツ〜モウ泥棒は止めだ」

セ「アウ止だよ」

おとよといふ者を代るべくに脊負せて武藏、麓を差して来る、

長「旦那、月が上つて参りました」

武「オ、成程」

如何にも宮本は林だから兩足が痛い、足の裏の痛いのを我慢をして、行きには夢中で上つたが、皮が破れて血が出て居る、夫を今まで氣が付かなかつた

長「旦那、お前さん足をどうかなすつたか」

武「俺は此の足の裏が熱湯の爲めに皮が腫て居る處へ、無理に歩いたので痛くて堪らん」

長「ヤア夫はどうもお苦しみてございませう、穢ない足袋でございませう、之は私が穿いて居る、合ふか合はねえか知れねえが、此の足袋を穿いたらツトは素足で歩くよりましでございませうから」

武「さうか、夫は忝じけない、貴様の足袋だから身共の足は入るだらう」

長「私は十文半でござりますから、大概大丈夫でございませう」

武「さうか」
長吉といふ奴が盲目縞の足袋を脱いで呉れましたから、武藏夫を穿きました

武「イヤ少しゆるいが之なら結構だ」

と夫から白鳥山を下つて来ると、ガーン、ガーンといふ音がする

武「何だらう」

隼の長吉といふ奴が月の明りに見て

長「七、大變〜」

セ「何だ長吉」

長「頭が来た〜」

セ「エ、ッ、悪い所へ来たな」

長「さうよく〜エ、旦那へ、那のガン〜といふのは、頭が突いて居る鐵の棒

で目方が六貫目あるといふ、頭が力があるから自慢で突いて居るんで」

武「ウム、何といふものだ、貴様の頭は」

長「〜エ、元武士なんで」

武「ウム、何といふのだ」

長「〜エ、森伴藏といつて、九州老人、腕ツ節が強いので」

武「さうか、宜し、面倒だ、出會たら切つてやる」

長「旦那有難ふございます、頭を殺して下されば、私共は安心して國へ歸れま
すけれども子分が居ます」

武「何人居ても宜い、汝等は其所で見物をして居る、逃げると切つて了ふぞ」

長「エへ、逃げやしません」

武「娘を其方へ置け」

間近くなる、武藏は右劍左劍の瑛を切つて居る處へ、月の明りに轟伴藏、ノ
カツくくと、上つて来る

伴「ヤイ、其所へ来たのは長吉と七ぢやアねえか、何で裸體になつてやアがる
んだ、何だ其所に居る眞赤な奴は」

武藏が

武「黙れ、汝が轟伴藏といふ賊か、人の大切な娘を勾引して參る不埒な奴、
汝の命は拙者が斷つて呉れる」

轟伴藏冷笑つて

伴「イヤ小賢しい事をいふな、覺悟をしろ」

と該の六貫目の鐵の棒をリウくと振廻す、武藏右劍左劍を引抜いたが、サ
ア來いといふ、長吉と七之助は是は大變な事になつたと見て居る中に、ヤツ
といふと伴藏が打込んで来る、六貫目の鐵棒だ、受ければ脇差を折られて了
ふ、ヒテリと宮本轉したが、借りた足袋を穿いて居たから、宮本は足の裏が
さのみ痛くない、體を轉したと思ふと手許へ跳り込んで轟伴藏の首をエイッ
といふとたつた一討、アツと驚ろく二人の子分の首を飛込みざまに右劍左劍
でバタくと切つた、

武「どうだ汝等、之なら驚ろいたらう」

長「ヘエ、旦那はどうも強いお方だ、全體何所のお方でございますね」

武「俺は肥後熊本に加藤家の家來で宮本武藏といふものだ、親の敵佐々木岸柳
を討たふと苦心をして岡山の城下白倉源五左衛門の道場へ泊つて居る中に

計略を食つて、熱湯風呂の大難に出會たのだ」

長「へエー、旦那、白倉先生は、そんな悪い奴でげすか、太い野郎だなう」

宮本は呆れ返つた、臭い者身知らずといふが、自分の方が餘ッ程太い、

武「サア城下の俵屋へ行け、掛合つて貴様達の衣類、故郷へ歸る路銀は拵らへてやるから、之から志ざしを改めて、人間になれ」

流石の二人は、情けの言葉に涙を流しまして、大喜こび、夜の八ッ頃はひ岡山の城下へ入つて来る

武「俵屋といふのは何所だ」
長「私は知つてます、毎日城下を通つて家を見て居ますから、お城下には先づ第一でござらませう金持では………」
武「どうか」

長「へエお嬢さん御安心なさいまし、茲でござります」

武「ア、大層立派な家だ、叩け〜」
手明の七之助が戸を叩いて

七「御免なさい、俵屋さん、御免なさい」
俵屋では一人娘が櫻はれたので、出入の者から親類が来て、寝る目も寝ない

で一同が疑議をして居る、所へ
〇「エ、何誰でございますか、どうか取込みがございますから明日お出を……」

宮本が、
武「コリヤ茲を開ける、當家の娘を連れて参つたのだ」

〇「へエ、夫アどうも有難ふ存じます」
サア店では騒ぎだ、

○「旦那、お嬢様を連れて来た方があります」
俵屋善兵衛店へ来る、締りを取つてガラ／＼と潜りを開ける、娘のおとよが先へ入つて来た

善「おとよか」

○「お嬢さんでございませうか」

と店の者は騒ぐ、跡から宮本が

武「サア兩人入れ」

俵屋で驚ろいた、髪はサンバラ、顔の赤い武士、跡から裸體の二人

○「オヤ泥棒が入つて来やアがつた驚ろいたな……」

武「ア、コレ驚ろくな汝等、拙者は加藤の家來宮本武藏といふ武者だ、委細の話しは跡でする、」

善「マア／＼どうぞお上んなすつて」

武「ア、忝じけない、イヤ兩人共に上れ、當家の主人は」

善「私にございます」

武「ア、さうか、御苦勞ながら當所の町奉行は何といふ方であるか、濟まんが紙と筆を貸して呉れ」

宮本筆を取つて認ため

武「氣の毒ぢやが當家の提灯を下げてお町奉行へ之を届けて呉れろ」

善「承知いたしました」

○「此の兩人は何でございます」

武「之は長吉七之助といつて泥棒の子分だ」

善「へエー、之を縛るので」

武「イヤ之は助けてやるのだ、拙者が他に用事があつて届けるのだ」
善「畏こまりました」

と店の者が届けに行く、跡で宮本が

武「さて主人、此の兩人は意見をした所が性來賊は嫌いだ、改心をしたといふものであるから拙者が助けたのだ、一人は四國、一人は豊前、兩人路銀がなくて仕方がなく賊の群に入つて居つたといふ、どうか濟まんが娘を助けた恩に被せるではないが、此の兩人へ着類路銀等の手當をしてやつては呉れまいか」

善「へエ、最より易い事で、娘の命にはかへられません」

長、七「旦那様有難ふ存じます」

長吉も七之助も涙を流して喜ぶ、渡世が呉服屋だから好きな物がある、直

ぐに着せて呉れた

善「時に宮本の旦那様貴方はどうなすつた」

實は是々と話しをするから

善「夫はどうも飛んだ事で、私が先祖傳來、家傳の焼傷の薬を拵らへる事を知つて居ります、只今造らへてお身體へ塗つて上げませう」

武「夫は忝じけなす」

主人が夫から先祖傳來焼傷の薬を造らへて、宮本の身體へ塗つて呉れました不思議にも十分間も経つ中に、ピリ／＼して居る、カッカとして居るのが、段々痛みが去つて来る、之が後に武藏が俵屋から薬の調合を教はつて、覺えて居て、宮本が修行中に、焼傷の薬と金創の薬を、此の人が覺えたから、舊幕の頃に、小笠原の家中、宮本の子孫の家で、施こしに此の薬を出したもの

でございませす、人を救つて置くといふと、斯ういふ又結構な惠みもある、所へ東か白むといふと、浮田の町奉行、矢田作左衛門、下役を連れまして、俵屋へ乗込んで来た、宮本武藏に面會をいたして

作「御書面の趣むき驚ろさ入りました、何故當岡山へ乗込む時に、浮田家へお届け下さらん、さすれば此の方に於て、岸柳の搜索を仕つたものを」

是は宮本が悪かつた、

武「誠にどうも矢田氏、この儀は某がしの手落、御用捨下さり」

作「兎に角、加藤家へ聞えて、浮田家の領分下さういふ事があつては主人秀家の落度と相成る、兎に角當城内へ御案内を………」

といふと宮本が

武「いや拙者も未だ身體が自由になりませせん、歩行にも難儀をいたしまする、

誠に勝手がましいが當家へ止まりたい」

作「イヤ御尤とも、然らば」

といふので、之から矢田作左衛門が家來を連れて、白倉の道場へ来て見ると弟子が四五人殺されて源五左衛門も死んで居る、ソコで道場へは封印をし、宮本の着類胴巻等を持つて俵屋へ来て矢田作左衛門から宮本へ見せると、胴巻はツツシリして居る、着類木剣を受取つて、

「誠にお手數で有難い」

作「跡の處置は手前の方で付けます、時に先生の傍はらに居ります、其の不思議の兩人は何で」

武「イヤ之はその手前仔細あつて連れて參つた、どうか此の兩人は此の儘に……」

作「左様でございませすか、然らば改ためて又伺がひます」

と矢田作左衛門は町奉行所へ引上げます、さて俵屋では着物を着せて兩人に金を十兩づつ、宮本の前へ並べまして

善「どうか此の兩人が國へ歸る、之だけあれば樂に戻れませう」
文祿年間に十兩といへば大層な金でございますから、土佐の高知や豊前の小倉へは樂に參れます、

武「之は主人飛んた散財を掛けて氣の毒だ」

善「どういたしまして」

武「サア長吉も七之助も當家の主人の恩の忘るな、早く國へ戻れ」
長「セ」へエ有難ふ存じます、我々兩人は之から國へ歸ります、夫では種々とお世話になりました、有難う存じます、御當家の且那樣、有難うございまして」

善「貴郎方も了簡を入れ替へて堅氣の商賣になんなさい」
長「セ」へエ有難ふ存じます、併し一寸伺がひますが、御當家を出ると、途中で縛られはしますまいか」

武「大丈夫だ、縛られれば宮本が解いてやる」
長「セ」有難ふ存じます」
と嬉し涙にくれて兩人が、岡山の城下を出て

長「さて七、お前とも心安くしたか何日までも一緒にには行かれねえ、お前は小倉へ歸る、俺は土佐だ、何でも國へ行つたら、辛抱して、堅氣になつて商賣をしやう、けれども宮本といふ方の御恩を生涯忘れちやあ往けねえ」
七「さうだとも、俺は之から國へ歸つたら、神棚へ名前を書いて上げて、毎日く拜む事にする」

長「さうか、夫ぢやあ七公、何日逢へるか知れぬえが縁があつたら又會ふせ」
七「ウム茲で別れるとしやう」

と相互ひに涙を流して七之助と長吉と別れましたが、人を助けるといふのは
宜い事で、情けは人の爲めならず、後に宮本が此の七之助に逢た時、七之助
の口から岸柳の所在が分つて、此の者の家に忍んで岸柳を灘島に於て宮本が
討つやうな事になつた、さて三日ばかり経ちまする宮本の焼傷は拭つて取つ
たやうに癒りました、白倉道場は遂に缺所いたして了ひ、さうして矢山作左
衛門が迎ひに来たから、岡山の城下へ參つて、岡山の城代に面會
○「誠にどうも白倉の不埒、お察し申す、まだお痛み所があらば早速醫者に掛
けませう」

と云ふ

武「イヤ各々に左様御心配を掛けては濟まん、最早少しも痛み所はござらん、
浮田家は朝鮮へお進みになつて居る由、手前も明日出立をいたしますから
宜しく、どうかお送り下さる事は他を憚るから御免を被むる」

といつて、武藏は大勢に送られると面倒だから俵屋へ来て、さて武藏がいよ
く出立といふ、家内の者が別れを惜む、主人善兵衛は
善「甚はだ失禮でございませうが、之をどうか路費に……………」

といふので武藏の前へ 百兩出した、時に宮本が

武「イヤ夫は入らん、只今御主君は朝鮮へお進みになつて居るが、國々を歩い
て、金が不自由なら、諸大名へ一本の届け書を出せば何百兩でも借りられ
るやう御主君がお頼みになつてある、行く先々で金子などは困らん拙者で
ある、之は身共に呉れたと思つて、どうか、此の後早拔水害などのあつた

時に、貧民が困つたら救ふてやつて呉れ、其の方が宜い、此の金はないものだと思つて、困窮の者にやつて貰ひたい」

善「是はどうも旦那様行届いたお言葉を頂ださ、然らば失禮御用捨下さい、さう仕りませう」

と俵屋一家の者も大きに感心をした、之から武藏は充分に支度をして岡山の城下を立ちました、さうして岸柳を尋ねたが何れへ岸柳が匿れたか分らない誠に雲を掴むやうな探し者だ。

第八席

岡山を出て宮本武藏、何所といふ宛はない、敵佐々木岸柳の行衛を尋ねながら、大和國添上郡正木坂の方へ出やうといふ心算でお出になつた、所が何所

で道を踏違ひたのやら、行けどもく山ばかり先方に見えて、人家がない田圃道、之は驚ろいた、之は大和路へ入つて道を踏違へたと見える、其内に日は山蔭に入らうといふ頃、之は弱つたな、農家でもあれば泊らうかと思召して、辿り辿つてお出になる、充分日は暮れて、チラ／＼見える燈火に、漸やう人家を見て、有難い、其の燈火をあてに来て見ると農家ではない、九尺四方のお堂

「イヤ此のお堂で今宵は夜明しをしやう」

階の下へ立つて見ると、尾形明神といふ頼面、拍手を打つて

武「加藤の臣、宮本武藏、道に迷つて歩行に難儀をいたしまする、一夜のお宿を願はしむござる」

と拜みを上げて、木連格子を開けて中へ入つて、笠を唇の下へ敷いて武藏、

賽銭箱に倚り掛つて、旅の勞れにや、ウト／＼間睡みますると

「起きよ武藏、目覺よ武藏」

といふ聲に眼を開けば白衣、白髪のお翁がまへに佇すみまして

「我は尾形明神である、毎夜此の所へ婦女子來つて我を祈る、さりながら、

我が力届かん、神力を以て、汝を此の所に呼寄せる、今宵其の女子來らば

汝力を添へて、一人の婦女子を助け得させよ、ゆめ／＼疑がふ事勿れ、善

哉々々」

姿は掻消す如く、ハツと宮本兩眼を開けば、南柯の一夢、全身に冷汗をかい

て居る、處へ足音がしたと思ふと、神前の鰐口がガン／＼と鳴つた、宮本が

すかして堂前を見ると、年齢彼是四十四五になる婦人

女「サア明神様、毎夜／＼水を浴びて、斯うしてお願い申すが、サツパリ御利

益かない、愈よ御利益がないなら、あつて、益ないから村の者を集めて來
て、お前さんの堂へ火を放けて焼て了ふから其の心算で、御利益を下さい

よ」

堂の中で聞いて居た宮本が、成程明神様も弱つたらう、居催促をして、火を

點けて焼かれては堪るまい

武「コリヤ女、汝の願ひは叶へて遣はす」

木連格子を開いて夫へ武藏が出る

女「オヤ、お前さんは何です」

武「俺か、俺は元加藤の家來、宮本武藏といふ武者だ」

女「ハアさうですか、私は此の大和郡山在、井出村の郷士、井出太郎左衛門の

娘の乳人で、まさといふ者」

武「成程」

武「此の明神様の御祭禮の夜宮に、主人の娘が賊にさらはれました、夫を助けて上げたいと思ひまして、毎晩明神様へ御参詣をして居ます」
武「成程、汝の主人の井出の太郎左衛門は、井出村で井出を名乗る、由緒のある家柄だな」

武「ハイ、苗字帯刀御免で、第一鐵砲の名人でございまして」
武「成程、賊の居る所を知つて居るか」

武「エ、存じて居りますよ」

武「然らば村の者を集めて、其の賊の住家へ向つたら宜らう」

武「どういたしまして、其の泥棒が大變な大泥棒で、百姓なんぞには手が付けられません」

武「さうか」

武「蒲生氏郷公の浪人で、前名尾形久彌といつて、荒川の大王といふ異名を取つた泥棒で」

武「成程」

武「軍用金を集めて、武器を揃へて、太閤様へ敵對をしやうといふのですよ」
武「成程、イヤ夫は剛い奴だ、イヤ女案内いたせ、身共が乗込んで退治してやる」

武「往けませんよ泥棒はお前さん四五十人居るんで」

武「イヤ四五十人居ても差支へない」

武「けれどもお前さんは、瘦ッこけて居て、體が小さいし、弱さうだ」

武「コレ、失禮な事をいふな、體が小さくても、瘦て居ても、身共は強さ」

「何だか自分で強いといふのは宛になりませんよ」
武「馬鹿をいへ大丈夫だ」

「夫は有難ふ存じます、夫では御案内をいたします」
武「知つて居るか、賊の住家を……」

「存じて居ります」

武「感心な婦人だ、サア参れ」

宮本氏が堂中で充分に支度をして、襷鉢巻、大小の目釘を取替へて
武「サア行かふ」

とおまさといふ乳人を先に立つて案内をさせ、尾形山の難所を越えて賊の住居へ出ました、門構で立派な造り

「之でござります」

とおまさが教えますと、賊ながらも元浦生の家来だけあつて立派な住居である、

武「コレ、お前の主人の娘の名は何といふ」

まさ「ハイ、玉江と申します」

武「宜し、夫さへ聞いて置けば、今に茲でお前に逢してやる」

まさ「併し門が締つて居りますから入る事は出来ずまい」

武「イヤ、決して差支へない」

大小を取つて宮本が

武「茲で一才持つて居れ」

とおまさを持たせ、十間ばかり戻つて来て、一聲掛けて、門を狙つて駆出して行つて、ヤツといふ矢聲と共に、門の家根に飛付いたのは、飛鳥の早業、

遂々家根を越えて中へ飛下りました、門をぬいて、左右の扉を開き

武「サア此方へ入れ」

おまさまも驚ろいた、恐ろしいどうも身軽いお武家様だと思ひ、大小を渡すと宮本は臆て立關に掛りまして、戸へ手を掛けると、此所は泥棒の家だから、門は締つて居るが締りが無い、泥棒の住居へ賊の入らう譯がない、大劔を右手に提げ、小劔を左りに取り、真くらがり、立關を大小の切先で探ると、立關の正面に、槍、弓などが飾つてあります、宮本は大劔を鞘に納めて了ひ、槍弓を手探りで見ると、鐵砲などがある、飛道具があつては面倒と、之をまとめて門を開いて出ると、皆な谷へ打込んで了つた、飛道具さへなければ驚ろくにたらんと、再び右劔左劔を引提て、左りの手に唐紙を開けて、入らうとすると

「誰だ此所へ來たのは」

泥棒だからガマリとしても目がさめる

「誰だといふ事よ、黙つて居ちやア分らねえ」

頭を上げた、宮本、エイツと左劔で首をゴロリと斬落し、四邊を見て、賊將の居間は何所であるかと、今度は此方の唐紙を開ける、

「オイ誰だ」

と一人、寢て居る男が起上るのを右劔を上げて夫へ首を斬落す、首の落ちた響きに一人が

「何だ」

と頭を上げるのを左劔でパマリと首を切落す、段々間毎々々々を斬り抜け、小泥棒十四五人を宮本は斬り捨て、疊廊下へ出て見ると、所々に斯う、欄間に

明火が點いて居る、之は往かんと、明火のすくない端を通る
○「其所へ來たのは誰だ」

武「俺だ」

○「俺ぢやア分らねえ、變挺な聲をしやアがつて、誰だ、此の野郎、そんな聲をして脅かしやアがる、汝は狸の源太の野郎だな」
宮本之を聞いて、旨い事を聞いたと思ひ

武「狸の源太だ」

○「忌な聲をする奴だ、源太」

と側へ來た奴を、たつた一討、之は結構、之ア狸の源太で奥へ行かふと血振ひなして兩刀をさげて奥へ進むだ

「誰だ」

武「狸の源太だ」

△「ウム源太か」

側へ來る處をバツサリ斬る、狸の源太で四人ばかり疊廊下で斬捨た

△「エーイ、ア、快い心持だ……誰だ此所へ來たのは、ノツサ〜と誰れと

いふ事よ」

武「俺だ」

△「俺ぢや分らねえ、名前をいへ」

武「狸の源太だ」

△「何を、馬鹿にするない此の野郎、此の山で狸の源太といふのは、俺の他にねえや」

「オヤ〜本物が向ふから出た、飛掛つてバタリと狸の源太といふ奴を一討」